いしかり暦第十一号　石狩町郷土研究会

澄月園池菱

清雅帖

石狩尚古社連句集

解読　前川道寛
校注　窪田薫・田中實

清雅帖

石狩尚古社連句集

例　言

1　本書は石狩尚古社二代目社主鎌田池菱が残した句帖「清雅帖」に収録されたものを中心に解読したものである。
2　解読は石狩町郷土研究会顧問前川道寛が行い、校注は窪田薫・田中實がおこなった。
3　題名については、窪田が原文に題のついていないものは「　」内に発句の上五を入れ、仮題とした。
4　各句の上に付した算用数字は句の順序を示す。
5　(ア)、(イ)、ウ（初折裏の略号）、ナオ（名残表の略号）、ナウ（名残裏の略号）で窪田が付した。
6　漢字の右側につけた契沖仮名遣による振仮名、濁点、有季の句の下につけた括弧内の季名などは、原文にないが窪田が書入た。
7　本書の編集・レイアウト・写真撮影は石橋孝夫、校正は石橋孝夫・田中實が担当した。

目次

発刊にあたって　石狩町郷土研究会々長　田中　實……2
一　尚古社と鎌田池菱　田中　實……3
二　俳人略歴　田中　實……4
三　連歌・俳諧・連句　窪田　薫……8
四　清雅帖解読……11
①清水の巻　明治三十五年八月～十二月　池菱、大道……12
②初秋の巻　明治三十五年八月～十二月　大道、池菱……14
③「鶴の脛」の巻　明治三十五年十二月　大道、池菱……16
④時鳥の巻　明治三十五年十二月　池菱、大道……18
⑤花の山の巻　明治三十六年一月～　痴楽、池菱、露焦……20
⑥「蕗の薹」の巻　明治三十六年一月～　池菱、痴楽……22
⑦「焚拾た」の巻　明治三十六年一月十五日～　痴楽、池菱……24
⑧「朧冷に」の巻　池菱、痴楽……26
⑨「山に山」の巻　明治三十六年三月十八日　痴楽、池菱……28
⑩「数積めば」の巻　明治三十六年四月　池菱、痴楽、桃雫……30
⑪俳諧新派の巻　明治三十六年四月～五月十日　池菱、痴楽、桃雫……32
⑫「夕立や」の巻　明治三十六年五月十日～六月十四日　露焦、痴楽、池菱……34
⑬「足跡」の巻　明治三十九年夏　雷庵、池菱……36
⑭「引返せ」の巻　明治三十九年夏　雷庵、池菱……38
⑮「山は晴れ」の巻　明治四十年九月～十一月十六日　娯水、池菱……40
⑯鶯の巻　明治四十年九月～十一月十六日　池菱、娯水……42
⑰「夕さりや」の巻　明治四十二年　閑窓、池菱……44
⑱「里近き」の巻　明治四十一年八月十一日　池菱、かつミ……46
⑲「活られて」の巻　明治四十一年八月～明治四十一年五月　秋香、池菱、かつミ……48
⑳「蓮咲や」の巻　明治四十年十一月　池菱、娯水……50
㉑雪の巻　明治四十年十一月六日～明治四十一年五月　娯水、池菱……52
㉒「魚の住む」の巻　明治四十一年十月　池菱、閑窓……54
㉓若竹の巻　明治四十二年四月～五月　旭風、池菱……56
㉔時鳥の巻　明治四十二年四月～五月　池菱、旭風……58
㉕「千日の苦」の巻　大正十五年十二月　錦風、池菱……60
㉖「窓の日」の巻　大正十五年五月　滕六、池菱……62
㉗雑煮の巻　昭和五年一月　秋香、池菱……64
五　清雅帖外解読……67
㉘歌仙「剃刀を」の巻　明治三十二年夏　採花、對几、池菱……68
㉙大學之連歌……70　池菱、採花……73
㉚「扇」の巻　採花、池菱……74
㉛「牡丹」の巻　池菱、採花……76
㉜鯉鱗行「大根之花」の巻　尚古社員……78
㉝脇起鯉鱗行「梅が香に」の巻　前川道寛……79
あとがき

発刊にあたって

石狩町郷土研究会は、平成七年発行の『鎌田池菱と尚古社－中島家資料にみる石狩俳壇と各地の俳人たち』に引き続き、今、尚古社々主鎌田池菱の連俳手控「清雅帖」を発行する。現在の道俳壇風潮のなかでは異色の俳書であろう。惟うに連俳が正岡子規の一文により文学上の価値を否定されてから幾久しい。

武田櫻桃四郎は、編著書の『俳壇辭典』（明治四十二年発行）のなかで次のように記している。

「連俳の文学上の価値はどうかと考へて見ると、殆ど零である。是は子規氏、鳴雪翁なども喝破して居られるし、亦俳壇を通じての説らしい。もつとも、先年高濱虚子氏が是等子規、鳴雪両氏の説に反対して、文学上の価値を辨ぜられたが、要するに其れも価値と云う上から見ては辨護に過ぎぬものとか見られなかつた。（中略）其處で、何故連俳は文学上の価値に乏しいかと云ふと、一巻を通じて統一した思想が表現されて居ないからである。連俳には、前の句と後の句と一句の関係はあるが、思想が前後一貫して居ない。初めから座興のやうに出来て居るから、一貫した思想を嘔ふのでは面白くない。そこで、変化を求めるために色々の錯雑した工夫が起つて、結局此のやうなものとなったのだろうが、思想に纏りが無いと云ふ條件の下に其価値は否定せられたのである。」と。

子規から起った新派と呼ばれる俳風に追従、そして、連俳を本位とした芭蕉をも批判しているが、この記述は当時の俳人の心情があからさまに表されていて興味深い。

新派隆盛に反比例して衰退し、俳壇の片隅に閉塞されてきた連俳が、昭和中期に詩人や文人に注目され、俳壇に及んでいま静かな広がりを見せている。ともあれ、古きを学び座の連衆と俳雅に遊んだ石狩尚古社員の連俳資料の発行が、石狩町文学史にさらなる厚みと重みを加えたことを喜ぶ。

「清雅帖」の解読にご執念を賭けられた先達会員前川道寛老師、発行の意義を多として校訂、注釈、玉稿と重々のご盡力を傾注下さった窪田薫先生、写真撮影・編集事務にあたった石橋孝夫会員、資料提供者中島勝久会員並びにご指導を賜った各位に深く敬意と謝意を表する。

平成八年三月吉日

石狩町郷土研究会々長　田中　實

一　尚古社と鎌田池菱

田中　實

石狩尚古社は江戸時代末期の安政年間に創始された。その主唱者は、石狩鮭場所の請負人であった村山金四郎（俳号嘯月）、勇拂出稼ぎ人名儀で村山家の鮭場所を経営し、本陣取扱い人も務めた十代山田文右衛門（俳号陽山）、幕府箱館奉行所石狩詰所の足軽亀谷丑太郎（俳号桂香）、同御用処帳場番人の増川菊次郎（俳号渓鶯）などである。

明治維新後も引続いて石狩に居住した山田、亀谷、増川に、鮭漁業家の井尻靜藏（俳号淇水）、同家支配人加藤円八（俳号有隣）、元水沢藩士で樺太アイヌ授産教師の高橋浪華（俳号月耕）ならびに地元有力商人の社員によって尚古社の活動は活発となり、これに山田得兵衛（俳号露蕉）、村山・井尻両家の支配人藤田利兵衛（俳号以孝）、医師・郵便局長の富田安宅（俳号石江）などが加わって、活動は地元の石狩から道内外にまで及び、尚古社は道央俳壇の拠点となった。

明治二十五年発行の『山田露蕉古稀之賀句集』（東京で印刷・出版）の全道的な出句者。同三十五年の『尚古集』の道内各地はもとより、本州、沖縄に至る応募者の広範囲さと、三千五百三十八句の選句数、道内外の選者十三名という豪華さが之を証している。

同三十六年に渡辺永助（俳号人也）が石狩小学校々長として着任し尚古社に加わったことから尚古社に新しい息吹が流れ込んだ。

同四十四年、初代社主以孝の『尚古社主還暦祝吟集』が発刊されたが、出句者は社員のほか道内各地から九十四名に及んだ。道外の選者は花之本聽秋、指頭庵耕雨、其角堂機一、星野麥人、聽雨窓竹冷、楽天居小波そして久留米に在った牛島滕六であった。

大正期に入ってからは、滕六、青木郭公、小笠原洋々、出口叱牛など道俳壇で活躍した新傾向の俳人とも交流を強めた。末期には石狩町長坂牛祐直（俳号瓢齋）、石狩病院長鈴木信三（俳号弦月）を加え、鎌田池菱が社主として、二十余名の社員で昭和十年代まで活動を続けた。

幕末期から昭和十年代までの約一世紀、石狩文学の原点、中心は尚古社の俳句活動であった。それはまた、鮭に明け鮭に暮れた石狩一世紀の興亡史に通ずる。

尚古社二代社主鎌田池菱（本名幹六）は万延元（一八六〇）年、現在の新潟県佐渡郡畑野町に生まれ、十代半ばで出国し渡道して石狩の㊤中島呉服店に勤め、のち主人吾作の没後、その妻の後添えとなり、分家して㊤中島商店を開業し呉服太物米穀学校用具並びに和洋小間物、国定教科書売捌きなどを商う大店とした。しかし、入籍することもなく、営業主にもならず、公職にもつくことはなかった。

そして、幼年時から親しんできた俳諧に精進し尚古社の物心両面にわたる運営に活躍した。大正十三年に二代目社主に就任、昭和十一年七十六才で没するまで務めた。俳号は池菱（池蓼）、別号は東園、澄月園、尚古院。池菱は北海道俳壇の重鎮として知られたほか、中央俳壇及び本州各地方俳壇との交流が広く、新旧派の俳人と風交し、また多くの俳誌に出句した。

尚古社資料館は、三代目勝人と四代目勝久が私費をもつて自宅隣に建築し、平成元年に開館した私設資料館である。池菱の遺品を主とした収蔵展示品は、尚古社関係資料各種、風交収集した五百点を越える短冊、書画など多種多様にわたり、いわゆる旧派俳諧関係資料の宝庫であり、道内外の参観者が感嘆して止まないほ

どである。池菱の子、亀蔵・孫武史はともに町収入役を務めた。

二　俳人略歴

田中　實

大道・本名萩原泰能（文政十一年～明治四十二年）
江戸神楽坂生まれ。幼時、学を江戸の宗参寺住職曹隆和尚に受け、二十二才剃髪して奥州に下る。幕府箱館奉行所石狩役所の荒井金助調役の勧誘で、文久元年（一八六一）、現在の厚田村古潭に移り同地に竜沢寺を開いた。明治二十年（一八八七）に還俗して神道の教導職となりのち郷社八幡神社々掌、厚田外六カ村社の社司を務めた。
別号は龍洞舎、厚田村の「正風社」の指導者でもあり、尚古社の和歌や俳句も指導した。享年八十二才。

痴楽・本名成田銓吉（安政三年～不詳）
別号無学庵。石狩町大字八幡町に住まいし、明治末期小樽に転居。尚古社々員。

露蕉・本名山田得兵衛（文政六年～明治四十一年）
松前（福山）生まれ。幼少から俳諧の道に入り、明治十二年に尚古社々員の増川菊次郎（俳号渓鶯）の招きで小樽郡勝納町から石狩に転住した。同二十五年（一八九二）に『山田露蕉古稀之賀句集』を東京で発刊した。また、函館の俳人、孤独堂無外と親交があった。尚古社の指導者格。享年八十四才。

桃雫　調査中

雷庵・本名矢嶋文治郎（明治十二年～大正八年）
情歌号は通喃子。明治三十九年小樽から石狩に転住し尚古社で活躍した。代書業。

娯水　本名は調査中
別号此水観。明治三十二年には北海道毎日新聞の俳句選者を務めていた。当時の住所は越前（現福井県）、のち小樽に住まいし小樽「白露会」の選者となった。また、「札幌吟社」で活躍し札幌に転居した。生没年不詳。

閑窓・本名荒井清三郎（嘉永五年～大正十四年）
別号對案亭、白藤舎、養志堂、不染居士。現群馬県館林生まれ。織物業。俳諧を初めて見佐に学び没後下平可都三に師事して連句の大家と言われた。
森山鳳羽、瀬川露城、渡辺萎文、大主耕雨ら多くの名俳人と交流して数多くの連句巻を残している。享年七十四才。遺句集『知々集』。

可都三（かつみ）・本名下平雅能（文政五年～明治四十三年）
現群馬県鳥渕村水沼の名主の家に生まれる。俳諧を久米逸渕に師事。武芸も達者であった。名主、戸長を務めた後、俳諧師として名声を高め、明治中期頃の評価では伊勢の大主耕雨、三河岡崎の植田石芝と並んで日本三俳人と称されたこともあったという。明治末期の典型的な行脚俳諧師で、遊歴は奥州、信州、北陸、関東、山陽・九州の各地方に及んだ。

秋香・本姓茂木（年齢不詳～昭和十六年）
別号蝶園。俳諧を小川尋香、下平可都三に学ぶ。大正、昭和期の尚古社選者を務めた。昭和四年の住所は武蔵国大里郡大崎村となっている。　とくに俳画、連句に長じていた。

旭風・本名旭太作（慶応三年～大正九年）
別号鎧雪庵。福井県勝山町生まれ。小樽に住まいし、明治二十二年に小樽「鴎会」を結成し会長となる。同年俳誌「薫風」を発刊し大正九年まで続ける。俳諧は五世夜雪庵宗匠より立机。享年五十四才。

錦風・本名平田金治（慶応二年～没年は調査中）
俳号勝荘庵錦風。別号梅の家かおる。江戸本所緑町生まれ。米穀商で水車業を兼営。明治二十五年（一八九二）北海道岩内町に移住し醤油醸造業を営む。大正五年小樽区色内町に転住し、米穀委託販売業を開業。同七年東京に転居。
俳諧は三世夜荘庵宗匠、五世東杵庵蔦斉宗匠に師事、連句の大家と称せられた。岩内に交友会を結成。大正七年に錦風が編さん長男晋風が校訂の『風交録』には道内の俳人四百二十余名が掲載されている。
大正十三年に、尚古社の選者として東京勝荘庵宗匠選とある。

滕六・本名牛島虎之助（明治五年～昭和二十七年）
佐賀県生まれ。同二十四年屯田兵として上川永山兵村に入地。同三十年鉄道会社に就職後、自営、道庁吏員を経て満州に渡り、終戦後引揚げて函館に住まいする。俳句は中学在学中にはじめ河東碧梧桐、内藤鳴雪に師事。渡道後は、白雪吟社、北星吟社を創り句誌を発行したが長続きしなかった。のち臼田亜浪の「石楠」創刊などに刺激され、札幌で「時雨」を創刊し本道俳句界の一大勢力に至った。「時雨」の発行は遅刊休刊の連続であったが、大正十五年から昭和六年、長谷部虎杖子らの編集担当により復刊し本道の代表俳誌となった。滕六は渡満後の昭和十二年に「時雨」を退陣したので、虎杖子らが引継ぎ「葦牙」と改題し継承されて今日に至っている。帯広の五男典義宅で没。享年八十才。
『牛島滕六句集』は昭和五十二年、葦牙主宰の山岸巨狼編で遺句集として発刊された。滕六は時々石狩に来て句会を開催し、尚古社員の指導にも当つた。

採花・佐藤いち（天保十四年?～明治三十四年）
女流俳人の奇傑、俳諧を春湖に学ぶ。のち郷里の信州佐久郡塩名田に帰った。享年五十八才。著書に連句集『穂あかり』、『こればかり』、『歳旦帖』がある。

對几・本名大山理兵衛（生没年不詳）
別号盧庵。小築庵春湖の高弟。小樽に居住。『尚古集』の選者の一人。

尚古社々員

以孝・本名藤田利兵衛（嘉永四年～大正十二年）
村山・井尻両漁業家の支配人。尚古社社長、町総代人等を務めた。小樽で没。

江雪・本名高橋儀兵衛（嘉永六年～大正十年）
官設の石狩罐詰所の払下げを受け経営主となる。町会議員を務

めた。

石江・富田安宅（天保六年～　没年不詳）
伊達邦直主従の当別移住に加わり渡道し石狩詰となる。医者、石狩郵便局長、質業。尚古社幹事、のち当別に転任。

若水・本名畠山清太郎（元治元年～明治四十五年）
石狩生まれ。漁業、荒物商、酒造業、町総代人、石狩水産組合長等を経て明治四十二年に第二代石狩町長を務める。

西吏・本名上野正（弘化三年～明治四十五年）
薩摩国生まれ。士族。開拓使官吏から樺太アイヌ共救組合長となる。町総代人、漁業。のち札幌に転住し区会議員、鹿児島で没。

静里・本名岡村静雄（嘉永元年～大正十一年）
鳥取生まれ。神職・教職に就き渡道し、札幌神社神職、明治二十年石狩八幡神社社司に就任。国学の造詣深く、詩歌にも勝れた。

戸方・本名中島房蔵（明治三年～大正十二年）
中島商店二代目。呉服・太物、雑貨販売業。町総代人、町会議員。のち小樽に転住。

松僊・本名飯尾圓蔵（安政元年～昭和八年）
能登国生まれ。高田・久留米の小学校長等を経て明治二十四年渡道。小樽量徳寺院代から翌年石狩の能量寺住職として来町。公私に盡した。

柳蛙・本名井上傳蔵（安政元年～大正七年）
武蔵国秩父下吉田村生まれ。明治十七年秩父自由困民党の会計長。　秩父事件後潜伏、欠席裁判で死刑を宣告される。同二十一年頃石狩に来る。伊藤房次郎の偽名で土地の貸付を受けた。小間物文具店。明治末期札幌に移り、のち野付牛（北見市）で没。

桂舟・本名加藤一魯（文久三年～没年不詳）
公吏。石狩郡親船町外九町三村戸長。石狩町花川村組合役場組合長。尚古社幹事。

桃下・本名中島源五郎（元治元年～没年不詳）
福島県梁川町生まれ。士族。石狩郡生振村小学校長、石狩町花川村組合役場収入役。のち石狩を去る。大正七年の住所は勇仏郡鵡川町。

蟻卵・本姓澤田

苔石・本姓富塚

幾石・本名高橋一精

露光・本名田中伊勢治（天保三年～明治三十九年）
陸中大槌村生まれ。明治二十年石狩に来る。種物商、雑穀商。

興信・本名馬場興信（明治七年～昭和十八年）
石狩町法性寺の住職。

黄樹・本名横山順倫（安政五年～大正十四年）

江戸浅草生まれ。幕府勘定役横山順光の二男。青森県庁、逓信省を経て明治三十二年石狩郵便局長として石狩に来る。町会議員も務める。能書家（書号城北）で篆刻、写真術の心得もある。のち石狩を去り名古屋で没する。

蛾仙・東洋・拝山・樂山・栄の本名、経歴等については調査中。

参考文献

中島勝久　平成七年　『鎌田池菱と尚古社』石狩町郷土研究会

連歌・俳諧・連句

窪田　薫

獨創性に乏しいとよく批判される日本文化が、逆に、その獨自性藝術性前衛性を諸外国から賞賛羨望されてゐるのが、**連歌・俳諧・連句**である。中世・近世・現代と、時代によって呼び名が変わってゐるが、次の三點の特徴は通時的に共有してゐる。

（一）五七五の長句と七七の短句を交互に連ね四季・月花・恋・人事等を詠み進めてゆく一種の古典的〈**定型詩**〉である。

（二）複数の作者である連衆が集まり、指導者司会者進行係である宗匠の捌きの下で、右の様な定型詩を共同製作する〈**座の文藝**〉である。

（三）式目といわれる一定の約束・ルールに従い〈**言語ゲーム**〉である。関白二條良基が一三七二年に制定した「應安新式」が連歌式目の原典として尊重された。諸種の俳諧式目はこれを簡約したものである。

連歌の源流を溯ると、中国南部・ベトナム・韓国・日本列島にわたる照葉樹林文化圏で行われている歌掛け・掛け合いに辿りつく。記紀や万葉の**歌垣・嬥歌**（かがい）にその姿をとどめ、現在でも地方によっては、盆踊りなどの時に掛け合い唄の歌はれる所がある。

鎌倉・室町・戦国と乱世を通じて、優雅幽玄の**連歌**は、支配的な文学であった。式目が尊重され、ルールのある文藝といふ特徴は銘記されて然るべきである。

連歌の用語は、優雅なヤマトコトバの歌語に限られてゐたが、俗語・卑語・漢語など俳言を用いる俳諧之連歌、略して、**俳諧**は、近世・江戸時代の支配的な庶民の文藝であった。俳諧を高尚な芸術に洗練したのは松尾芭蕉であった。

中世の連歌では百行の〈百韻〉が標準とされたが、俳諧では、芭蕉の愛好した三十六行の**歌仙**（一名・鯉鱗行）がスタンダードとされる。懐紙二枚からなる歌仙の構成を表示すると……

初折（一の折）［初表　表六句
　　初裏　裏十二句］

名残折（二の折）［名残表　十二句
　　名残裏　六句］

俳諧の最初の第一句、**發句**（立句）は、挨拶・即興・属目の句で、当季の季語と「や」「かな」等の切字を入れる。「や」「かな」は發句にだけ用い、他の句に使ってはならないとされてゐる。

二句目＝脇は、發句と同時・同場で同季の季語を入れる。漢字留が好もしいとされる。

發句と脇は、「實」の世界を詠むが、第三から「轉じ」が始まり、四句以後の平句は「虚實」入り交じり、花月・恋・森羅万象と、一行づつ一歩づつ新しい世界が展開されてゆく。これを芭蕉は「ゆきて帰らぬ心」と説いている。

表六句には、神祇・釈教・恋・無常・懐旧・軍事・怪奇・病体・地名人名等固有名詞・花などは詠んではいけないといふ禁忌がある。但し發句は例外で、何を歌ってもよい。

構造的には俳諧は、季語を含む有季の雑の句群と「縞」を作ってゐる。春・秋はそれぞれ三乃至五句、夏・冬はそれぞれ一乃至三句続ける。恋は一句で捨てず、普通二句、五句迄續けてよい。恋は一巻中、最低二個所は入れること。季を移すときは原則として間に雑（＝無季）の句を夾む。例外的に直接他句へ続く場合は〈季移り〉という。

Moonを賞翫の月、Monthを月次の月といひ、**月の座**になるのは賞翫の月である。**月の座**は、各面〈初表・初裏・名残表〉に一個づつ計三個配置される。

花の座は、各折に一個づつ計二個。花の座に使われる花は「正花」といひ、桜のみに限定されず、賞美に値する花やかさの精髄で、「花」といふ文字を必ず使用すること。

俳諧の基本となる最小單位は、「**三句の渡り**」である。

（n－2）句目　打越　うちこしA
（n－1）句目　前句　まえく　B
（n－0）句目　付句　つけく　C

付句は前句には「付き」、打越から「轉じ」なければならない。「付け」と「轉じ」の合力を「もどき」といふ。

「付け」には目はゆくが、「轉じ」はおろそかになり易い。付句は常に打越と異質でなければならぬ。即ち、

(1) 句の自・他・場・自他半・アシラヒの別。
(2) 素材・用語。
(3) 文体。

などが同一・同様・同類・同趣（つまり観音開き）にならないよう、意識的に配慮の事。

立花北枝の『**付方自他伝**』による句の分類。「自」とは自分、「他」とは他人、「自他半」は自分と他人、「場」とは人間以外の森羅万象を扱った句。「アシラヒ（会釈）」は人間が詠まれているが、自でも他でもない句で、自の句に続けば「自アシラヒ」、他の句に続けば「他アシラヒ」となる。

「ゆきて帰らぬ」変化の詩である**俳諧の流体力学のメカニズム**を、泰西の文藝批評家の用語を拝借して解説すると次のようになるであらうか。　AにBを付け、BにCを付けてゆく。ポール・リクールの「生ききた隠喩」の筆法を借りるなら、Aを解釈してBを創造し、次の作者はBを解釈してCを創造してゆく。この解釈と創造の行程は、ハロルド・ブルームの称へる「創造的誤読」であり、又、ジャック・デリダの提唱した「脱構築」deconstortucとも讀むことができる。此のABCの一セットの中で、AとCとが同趣・同様であるのは「觀音開き」と呼ばれ最も落ち入る易いので最も警戒すべきタブーとされる。

AとCとが、様異なる無関係な句であるので、一巻を通した一貫したテーマもストーリもない。一貫性は拒否され排斥されるのである。この點が、世界文學中に類のない異色の特殊性であり、ドナルド・キーンを始めとする世界中の日本文學研究者達の、注目・賞讃・垂涎の的なのである。

俳諧は此の特殊性のために、明治維新以後の文明開化・脱亜入謳・近代合理主義・近代的自我を旗印とする時代の精神＝パラダイムに合はず、正岡子規の「**連俳非文學論**」にたたかれて、隠れ切支丹の如く、一時鳴りをひそめてゐた。「俳諧」なる名称も、女中、小使なみの差別的賤称と同情され、〈お手伝いさん〉〈用務員〉なみに「**連句**」と呼ばれるようになった。

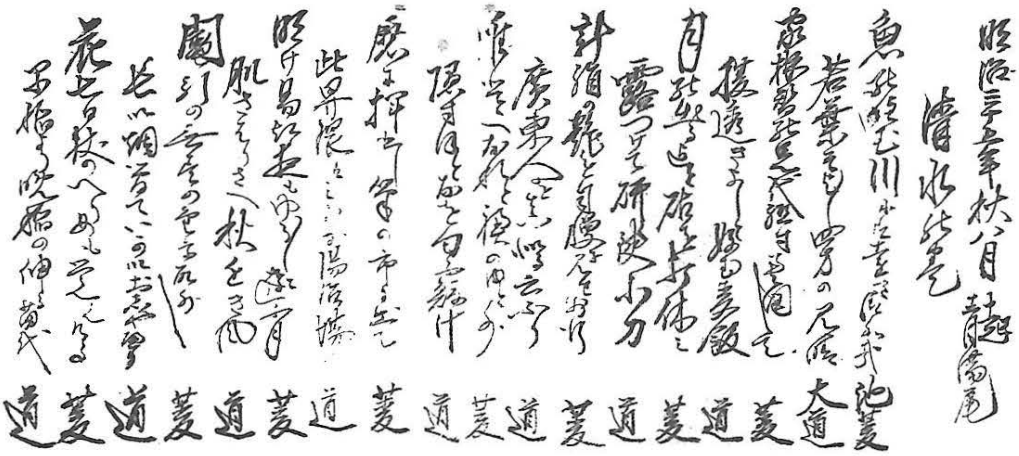
時代が変わり、價値感も変った。

産業革命に連動したモダンから、情報革命に連動したポストモダンになり、その感性・行動様式・考へ方の中で、「連句」は、俳句や短歌や現代詩を追ひ抜いて、最先端最前衛アヴァンギャルド、アヴァンポップスのアートとして浮上してきた。

連句は、ホイジンガやカイヨワの賞揚する「遊び」であり、ヴィットゲンシュタインの称へる「言語ゲーム」の権化であり、ジュリア・クリステヴァの言ふ引用のモザイクとして形成されるテクストであり、ロラン・バルトの言ふ「テクストの快楽」そのものなのである。

平成七年十月五日稿

四清雅帖解読

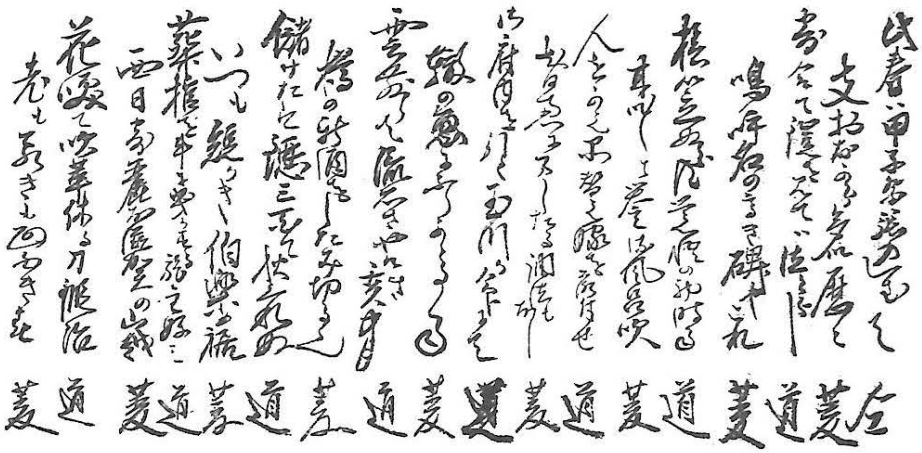


明治三十五年秋八月起　十二月満尾

①清　水の　巻

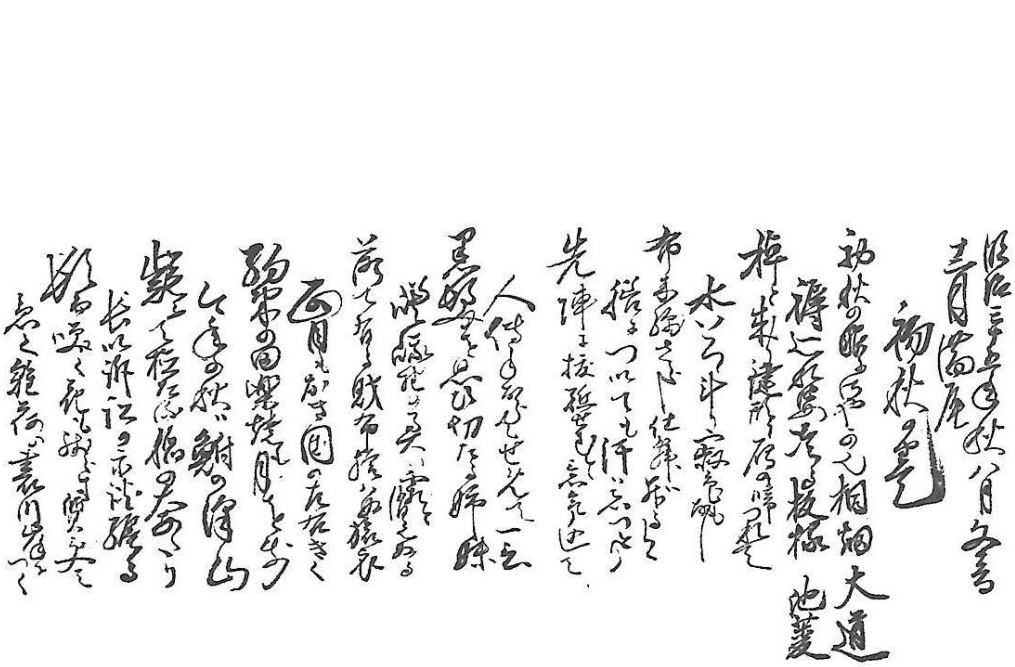
1　魚の住む川には遠き清水哉　（夏）　池菱
2　若葉そよ〳〵四方の見晴　（夏）　大道
3　家根替の足代組す差図して
4　腹透きよしと好む麦飯
5　月の出る迄と砧を打休み　（秋）
6　露つけて研ぐ鋏小刀　（秋）
7ウ　新絹の艶を自慢に見てお行　（秋）
8　廣東人を真似る云ぶり
9　唯ひとへなれど襖の内と外　（冬）
10　隠すほどなを匂ふ鰒汁　（冬）
11　慰に押出し筆の市に出る
12　此界隈はみんな湯治場
13　明け易き夜もゆる〳〵と遊ぶ月　（夏）
14　肌ざわりさへ秋近き風　（夏）
15　鬮引の無尽の金を取外し
16　長い烟管でいかいおしゃべり
17　花七日杖のへりめも覚えける　（春）
18　早稲より晩稲の伸る苗代　（春）

（注）
7新絹　今年の繭から取った新生糸で織った絹。今年絹・新機（しんはた）。



19 此春は甲子祭張込んで　（春）　道
20 支村ながら多い歴々　菱
21 寄合て鎧を見ては泣くらし
22 嗚呼名の高き碑やこれ
23 檜笠ぬらす覚悟の初時雨　（冬）
24 甘い〳〵と誉る風呂吹　（冬）
25 人をかえ品替え嫁を落付せ
26 知恵にましたる調法もなし
27 御府内を引く玉川は命にて
28 轍の跡にふりかゝる雨
29 雲散りて流石さやけき亥中月　（秋）
30 樽の新酒をしたみ切るなり　（秋）
31 儲けたは鐚三百で秋くれぬ　（秋）
32 いつも短かき伯楽の裾
33 葬棺を牛に曳かする施主好み
34 西日奇麗な滋賀の山越
35 花咲て吹華休る刀鍛冶　（春）
36 老も若きも面白き春　（春）

（注）
19甲子祭　甲子の日の前夜、子の刻まで起きて居て二股大根・黒豆など供え、大黒天を祭る風習。江戸時代の商家で行はれた。24風呂吹　厚切の大根や蕪をふっくらと茹であげ、練味噌をどろりとかけて食べる。27　御府内　江戸時代に江戸の市域とされた地域。朱引き内。29亥中月　陰暦二十日の月。30したみ切る　滴のしたたりを垂らし切る。



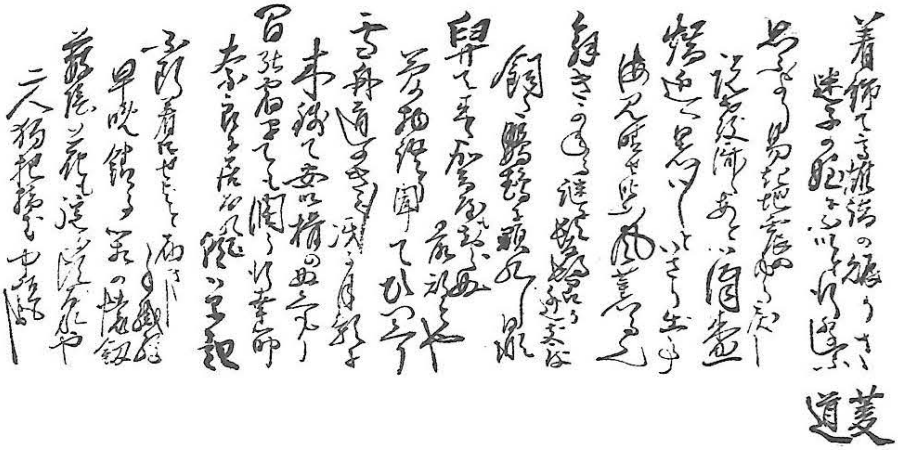
明治三十五年秋八月　文音　　十二月満尾

②初秋の巻

1 初秋の眼にさやかなり桐畑　（秋）　大道
2 褥辺れば冷る板椽　（秋）　池菱
3 棹となり鍵形り雁の啼つれて　（秋）
4 水いろ斗り寂色もなし
5 布木綿さらし仕舞ば昇る月　（夏）
6 膳についても汗はしっとり　（夏）
7ウ 先陣に抜駈せむと意気込で
8 人傳手ならでせめて一言
9 黒髪を思ひ切たる姉妹
10 嵯峨野の奥の霜と消えぬる　（冬）
11 落て有る財布拾はぬ旅衣
12 面目もなき国の右左きく
13 約束の田楽焼も月を出し　（秋）
14 今年の秋は鮒の沢山　（秋）
15 疑ふて植たる稲の大あたり　（秋）
16 長い訴訟の示談纏る
17 頓而咲く花も残らず質受て　（春）
18 急ぐ雛荷の裏川岸につく　（春）

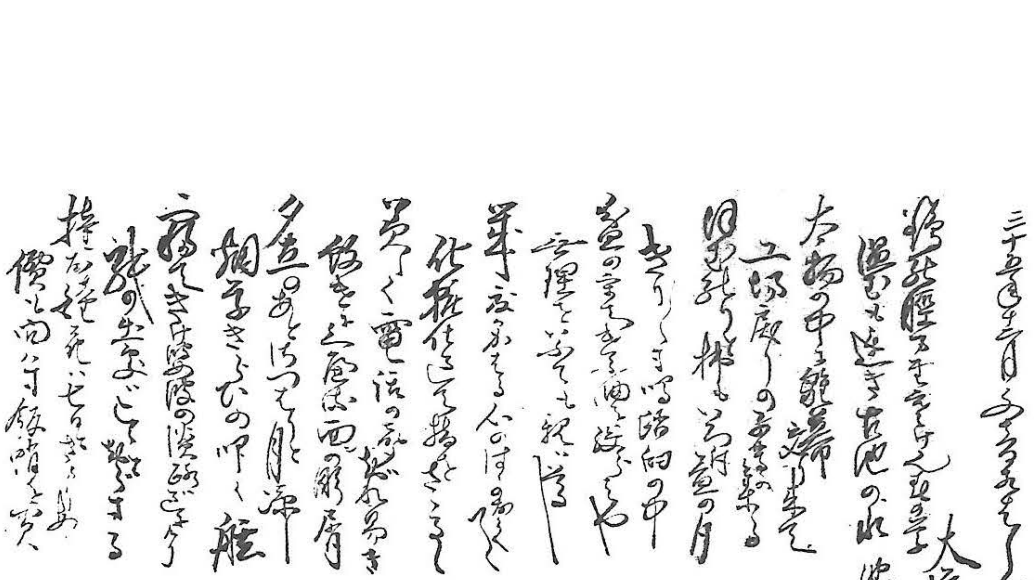
（注）

12 左右　あれやこれや。状況。様子。17 頓而　急に。俄に。



19 着飾て高雄詣の賑かさ　（春）　菱
20 迷子の姪にふいと行逢ふ　道
21 思ふより易き地震のゆり戻し
22 説教済だあとは酒盛
23 端近く暑い〳〵といさり出て　（夏）
24 海見晴せば風薫るなり　（夏）
25 解きかねる謎に髪髻が逃支度
26 飼た鸚鵡に顕れし罪
27 舁で来た駕屋も知らぬ最期とや
28 夢物語り聞てびっくり
29 雪舟道のきら〳〵冴る月影に　（冬）
30 木銭で安い褌のぬくもり　（冬）
31 間の宿までも潤う行幸筋
32 奈良に居なれて朝は早起
33 不断着にせよと届きし手織縞
34 早晩錆る箱の懐剣
35 藪陰の花も綻ぶ頃なれや　（春）
36 二人狗把摘む中垣もよし　（春）

（注）
25 髪髻　髪をうなじのあたりで切り揃へ、垂らして置く小児の髪形。小児・幼児。30木銭　旅人が持参の米や乾飯を炊くため宿に払ふ薪代金。木賃。

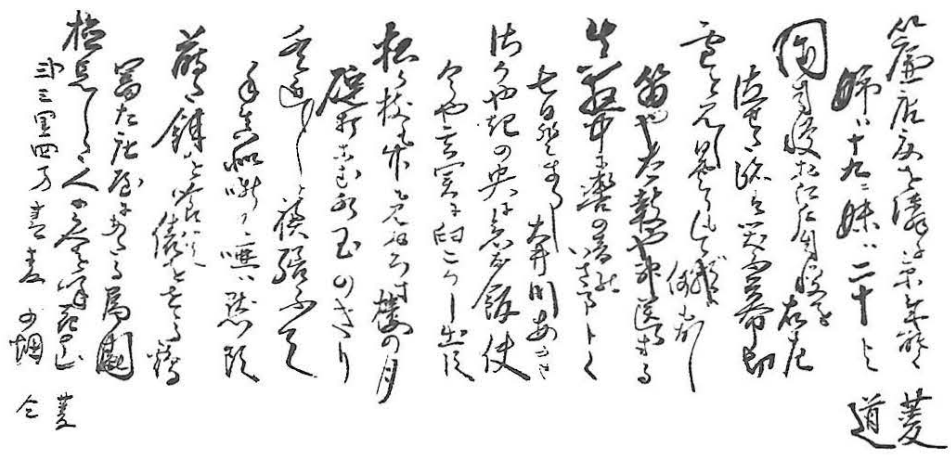


三十五年十二月文音はじめ

③「鶴の脛」の巻

1 鶴の脛まだ寒げ也春の草　（春）　大道
2 温むも遅き古池の水　（春）　池菱
3 太物の中に雛幕交り来て　（春）
4 工場戻りの子等の集る
5 ほんのりと柿もいろ付昼の月　（秋）
6 きりぎりす鳴踏臼の中　（秋）
7ウ 盆のうち遣ふ油を絞らばや　（秋）
8 無理をいふても親は尊し
9 幾度かかはる心のはかなくて
10 化粧仕過て指をさゝるゝ
11 美しく電話の聲は知れ易き
12 蚊遣にくべる面ンの彫屑　（夏）
13 夕立のあとさっぱりと月涼し　（夏）
14 烟草ぎらひの叩く舷
15 寝てきけば波の淡路は過にけり
16 紙の出處はこゝと知らする
17 撞な鐘花は七日ときまりあり　（春）
18 價も問はず飯蛸を買　（春）

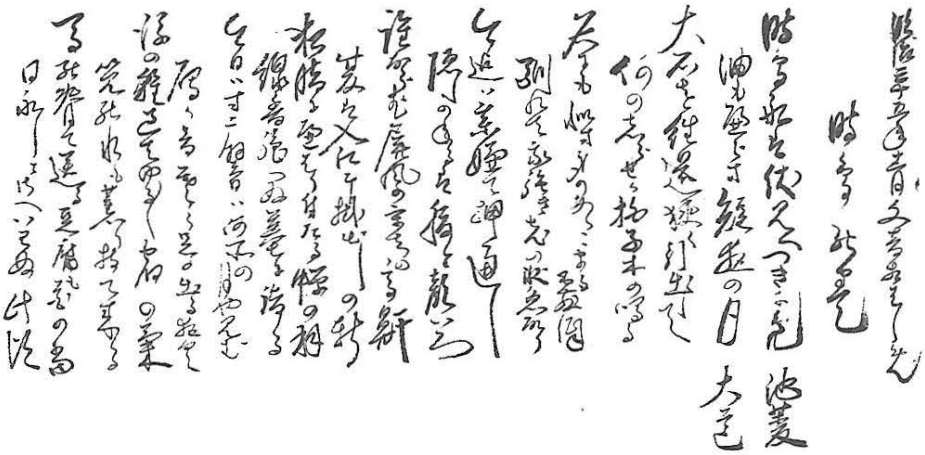
（注）
3太物　綿織物・麻織物など太い糸の織物の総称。絹織物に対して言ふ。
18飯蛸　正月、二月頃さかんに出る。頭のなかに飯粒のよふなものがあるので言ふ。



19 簾店夏を隣に景気能く　（春）　菱
20 姉は十九に妹は二十よ　道
21 国自慢お江戸自慢を右左
22 泣せた跡は笑ふ幕切
23 雪と見し曇りも今は何もなし　（冬）
24 笛や太鼓や神送りする
25 真夜中に轡の音のいさましく
26 七日とまりし大井川あき
27 おかやきの央に急な飯使
28 今や玄関に臼こかし出す
29 松が枝も竹も見おろす樓の月　（秋）
30 碇打こむ水玉のきり　（秋）
31 冬近し〳〵と襖繕ふて　（秋）
32 手真似噺で唖は黙頭
33 蒔た餌は食はで俵をせゝる雉
34 富だ庄屋にあたる富闘
35 植足した人の名を呼花の山　（春）　菱
36 弐三里四方青麦の畑　（春）　仝

（注）
27おかやき　ほかの男女が親しくしているのを、はたからやきもちを焼くこと。

ので言ふ。

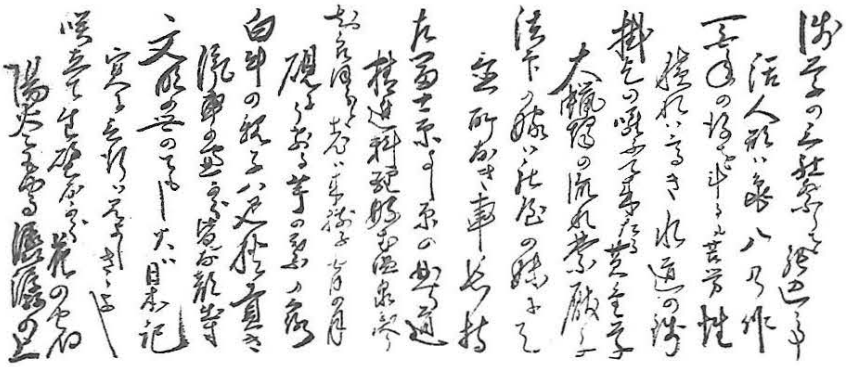


明治三十五年十二月文音はじめ

④時鳥の巻

1 時鳥船は伏見へつきに鳧　（夏）　池菱
2 油もへらず短夜の月　（夏）　大道
3 大石を往還狭く引出して
4 何のしらせか拍子木の鳴る
5 名にも似ず身のあたゝまる霰酒　（冬）
6 馴れて我強き老の氷魚取り　（冬）
7ウ 今迄は棄嫌て押通し
8 隠しかねたは腹と顔いろ
9 誰ならむ屏風のうちの高鼾
10 夏は入江に掛出しの軒　（夏）
11 松脂にへばり付たる蟬の羽　（夏）
12 線香絶えぬ墓に詣る
13 今日は寸广翌日は何所の月や見む　（秋）
14 雁が音寒う足の出る夜具　（秋）
15 後の雛迄ゆる〳〵と宿の菊　（秋）
16 筧の水も薫り持て来る
17 馬の背で送る豆腐も花の当　（春）
18 日永しとさへいわぬ此頃　（春）

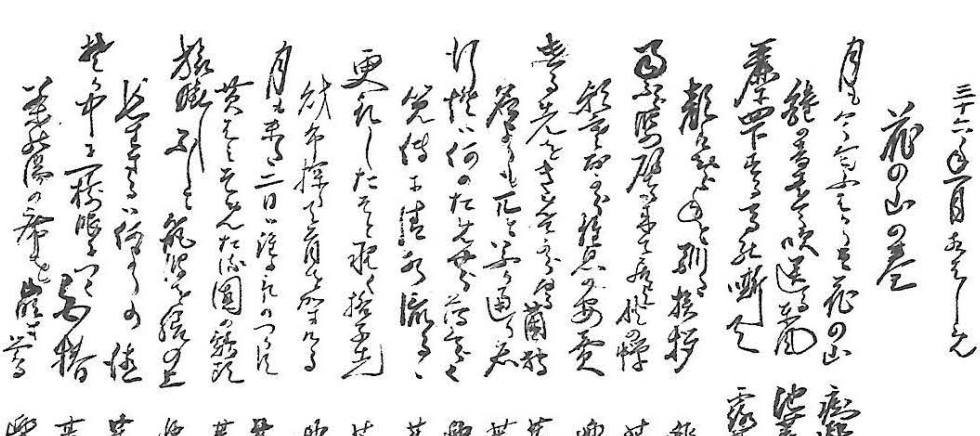
（注）
5 霰酒　奈良の名産で、酒の中に糯米の粧を浮かべたもの。霙酒。
13 寸广　須磨。15 後の雛　九月九日の節句の菊雛。三月三日の春の雛祭に対して言ふ。



19 浅草の三社祭りを張込で　（春）　道
20 活人形は亀八の作　菱
21 百年の後を斗るも苦労性
22 積れば高き水道の銭
23 掛乞の囃子て来たる黄金草　（冬）
24 大蝋燭の流れ禁厭ふ
25 法命の嫁は庄屋の妹にて
26 置所なき車長持
27 左富士原よし原の戻り道
28 精進料理好む温泉戻り
29 ちらほらと老い来様子宵の月　（秋）
30 硯にうける芋の葉の露　（秋）
31 白牛の親子八匹秋貢ぎ　（秋）
32 汽車の窓から皆ンな顔出す
33 文明の世のともし火は日本記
34 実に実行は見よしきよし
35 咲立て生壁ながら花の宿　（春）
36 陽炎もゆる潺潺の上　（春）

（注）
19三社祭　浅草神社の祭礼、五月十七、十八日で、今は夏の季語。古くは陰暦三月で春。23掛乞　売掛金の回収、又はその回収に歩く人。盆暮の二回の決済が普通。季題としては年末の掛乞。27左富士　原から吉原へ西行すると道が曲折して右手に見えていた富士山が左手に見える。36潺々　さらさらと流れる水。

対して言ふ。



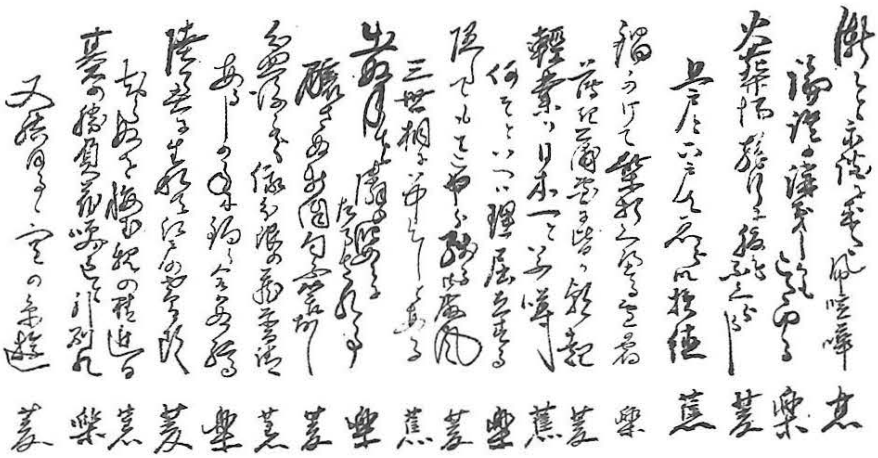
三十六年はじめ

⑤花の山の巻

1 月も今匂ふばかりぞ花の山　（春）痴楽
2 鐘の音遠く吹送る東風　（春）池菱
3 麗に雫する馬の嘶て　（春）露蕉
4 顔は知らねど馴た挨拶　楽
5 雨ふらば壁に来て居よ秋の蝉　（秋）菱
6 朝寒ながら雑魚の安賣　（秋）楽
7ウ やる先をきめてからなる菌狩　（秋）蕉
8 名よりも兀といふが通り名　菱
9 行燈は何のためやら薄ぐらく　楽
10 筧傳に清水流るる　（夏）蕉
11 更衣したぞと覗く格子先　（夏）菱
12 財布探りて首をかすげる　楽
13 月も未だ二日は誰も気のつかず　（秋）蕉
14 黄ばみそめたる園の雞頭　（秋）菱
15 旅嬉しふして筑波を膳の上　楽
16 長生するは何よりの徳　蕉
17 その中に一樹眼につく白椿　（春）菱
18 茶の湯の席を崩す鶯　（春）楽

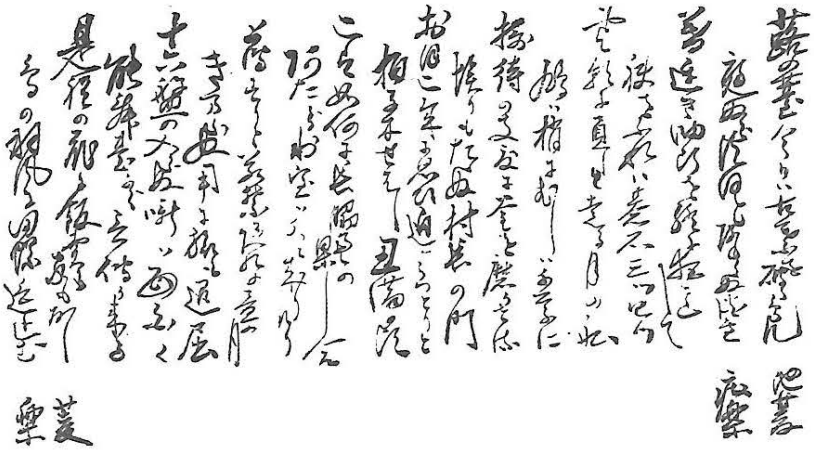
（注）

3 雫　尿のこと。



19 漸くと示談に成た凧喧嘩　（春）　蕉
20 論語の講義しかもこたゆる　　楽
21 火葬場の施行に腹をふくらまし　　菱
22 上戸と下戸でえらい損徳　　蕉
23 鍋かけて柴折くべる雪の宿　（冬）　楽
24 薄き蒲団に皆の朝起　（冬）　菱
25 軽業は日本一といふ噂　　蕉
26 何ぞといへば理屈立する　　楽
27 隠してもどこやら残る御殿風　　菱
28 三世相には中よしとある　　蕉
29 出ぬ月を隣の婆々にだまされて　（秋）　楽
30 醸さぬ新酒匂ふ筈なし　（秋）　菱
31 盆後から俄分限の蔵普請　（秋）　蕉
32 あるじの年に釣り合はぬ縞　　楽
33 陸奥に生れて江戸の鳶頭　　菱
34 知らぬを悔む親の精進日　　蕉
35 碁の勝負花咲迄と引別れ　（春）　楽
36 又結ぼるる宮の糸遊　（春）　菱

（注）
28三世相　歌舞伎「三世相錦繍文章」の通称。世話物。一八五七年に江戸中村座初演。遊女お園と大工の六三郎の情話を脚色したもの。全幕にわたり常磐津を使用。

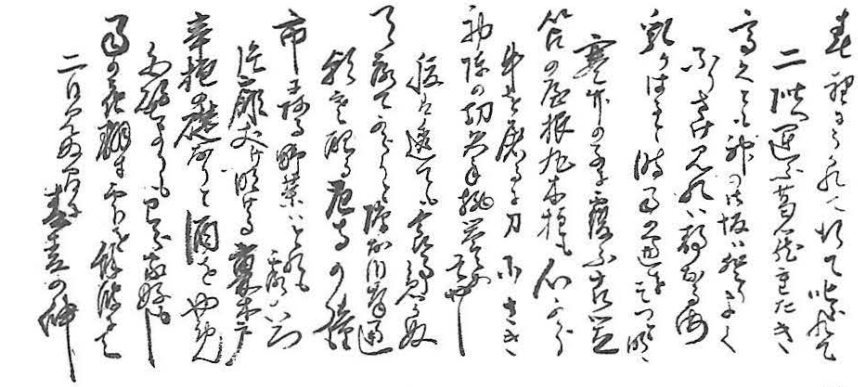


明治三十六年一月興行

⑥「蕗の薹」の巻

1 蕗の薹今日は古葉を破り皃　（春）　池　菱
2 庭ぬらすほどなさぬ淡雪　（春）　痴　楽
3 暮遅き油断を終に夜道して
4 袂をふれば碁石三つ四つ　（春）
5 雲影に負けじと走る月の船　（秋）
6 鳩は梢にむしは千草に　（秋）
7ウ 接待の支度に釜を磨かさる
8 埃りもたゝぬ村長の門
9 おぼこ気に思ひ通してうつとりと
10 拍子木せはし丑満の頃
11 こは如何に長脇差の果し合
12 あたら村宝は水と成りけり
13 薄すりと若葉隠れの昼の月　（夏）
14 きまらぬ用に旅も退屈
15 十六盤の入らぬ噺は面白く
16 能舞台から言伝が来る
17 是程の花に飯賣る家もなし　（春）　菱
18 鳥の羽風に田螺迄止む　（春）　楽

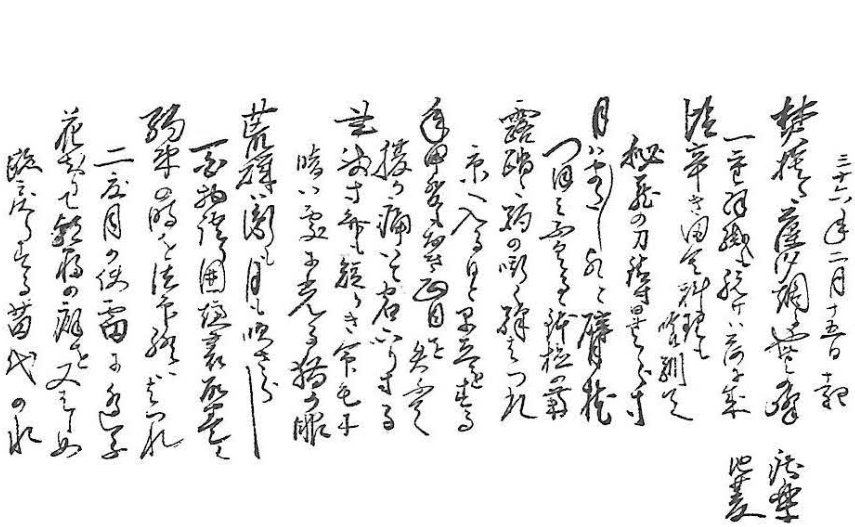
（注）11長脇差　幕令では長さ一尺八寸以上の脇差を言い、町人は差すことを禁止された。近世後期、長脇差で関東地方を横行した博突打ちの異名。



19 春の野にうかれて行て叱られて　（春）
20 二階へ運ぶ葛籠重たき
21 高くとも神の御坂は登りよく
22 ふりさけ見れば静かなる海
23 乳がはると時雨の窓をそっと明　（冬）
24 寒竹の子に覆ふ古笠
25 苫の屋根丸木柱も心から　（冬）
26 牛を屠るに刀小さき
27 初陣の功名手柄誉めそやし
28 腹は透ても食事急がぬ
29 月落てからりと隙な川岸通　（秋）
30 朝寒配る尼寺の鐘　（秋）
31 市にある野菜はどれも露のいろ　（秋）
32 片扉丈け明ける裏木戸
33 辛抱の礎なりと酒をやめ
34 白壁よりもわら屋好もし
35 雨の花翻す雫を餘波にて　（春）
36 二日見ぬ間に青麦の伸　（春）

（注）
32 裏木戸　裏の出入口。

楽



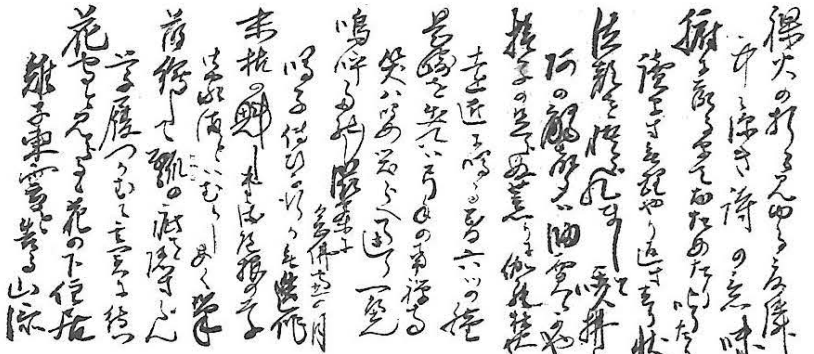
三十六年二月十五日起

⑦「焚捨た」の巻

1 焚捨た藻汐烟るや雲の峰　（夏）痴楽
2 一重羽織も脱げば荷に成　（夏）池菱
3 塩辛き田舎料理も喰馴て
4 秘蔵の刀錆ず曇らず
5 月はまだ〳〵〳〵よしと臂枕　（秋）
6 つぼみふくるゝ鉢植の菊　（秋）
7ウ 露踏だ駒の嘶く駅はづれ
8 京へ入る日と早立をする
9 年甲斐もなき面目を失ふて
10 腹が痛いと宿下りする
11 書残す弁も短かき命なり
12 暗い處に光る猫の眼
13 荒磯は衛も月も吹きさらし　（冬）
14 百物語り囲爐裏取巻く　（冬）
15 約束の時を法命終いはづれ
16 二度目の使雷に逢ふ　（夏）
17 花ちりて朝寝の癖を又はじめ　（春）
18 踏戻りする苗代の水　（春）

（注）

1藻汐　藻塩。海藻からとる塩。20詩　漢詩。24油賣　点灯用種油の行商人。



19 裸火の折々見ゆる夏隣　（春）　菱

20 中々深き詩の意味　楽

21 腑に落るまでなだめたり叱りたり

22 讀まず無理やり返す去り状

23 泣顔を悟られまじと咳拂ひ

24 あの觸聲は油賣りかや

25 捨子の足らぬ薫りに伽羅焚し

26 遠近に鳴る暮六つの鐘

27 是崎を出れば弓手の南禪寺

28 笑はば笑らへ通り一ぺん

29 嗚呼たのし澁茶に念佛窓の月　（秋）

30 鳴子傳ひに行くが無造作　（秋）

31 末枯の魁したる屋根の草　（秋）

32 御家流とはむかしめく筆

33 蒔繪して瓢の底を隠すらん

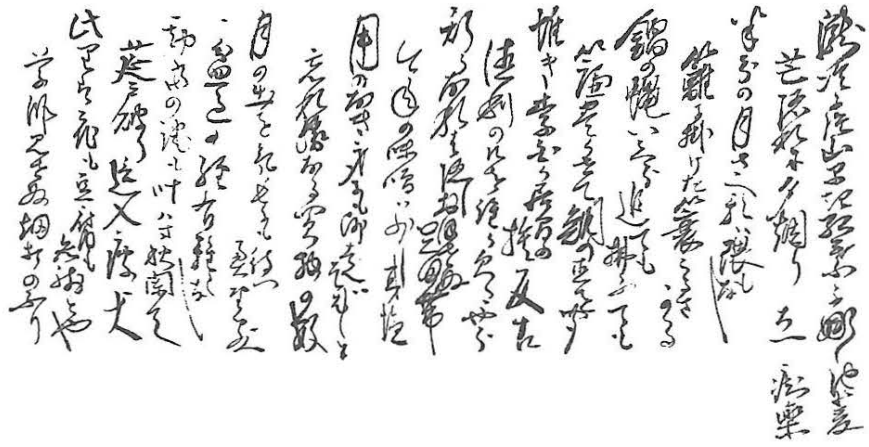
34 草履つかむで玄関に待つ

35 花守と見らるゝ花の下住居　（春）

36 雉子東雲を告る山添　（春）

（注）

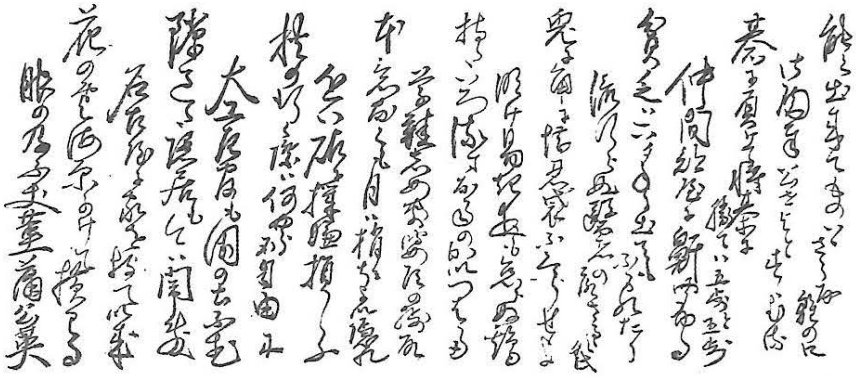
25伽羅　香木の皮をとって香料としたもの（奇楠）。27弓手　左の手。または左の方。27南禪寺　京都東山の北に在る京都五山の一。32御家流　尊円親王から出た書法の流儀。



⑧「瀧冷に」の巻

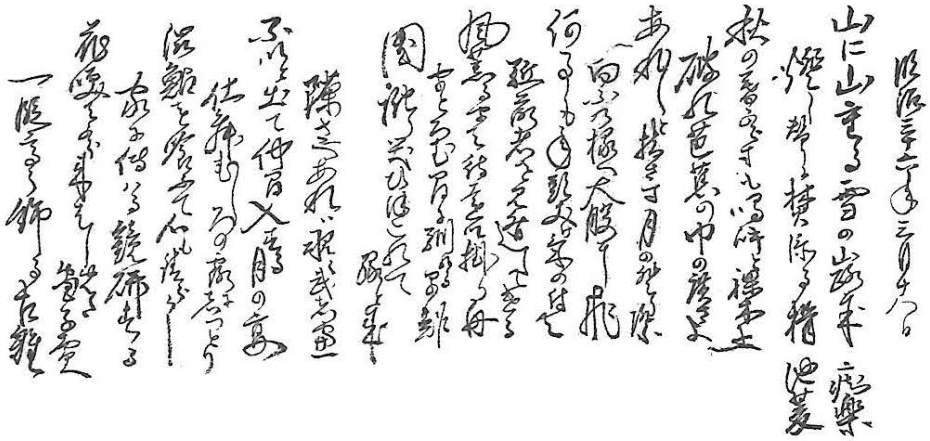
1　瀧冷に片山早き紅葉かな　（秋）　池菱
2　芒隠れに夕烟り立　（秋）　痴楽
3　半分の月さへ影は隈もなし　（秋）
4　籬に掛けた蓑うるさがる
5　鍋の蠅いくら追ても拂ふても　（夏）
6　簾巻かせて鯛の愬を聞く　（夏）
7ウ　堆き李白が居間の捨反古
8　徳利の口を誰が欠たやら
9　斯うなれば隠しおほせぬ岩田帯
10　今年の味噌は少し甘塩
11　用のなき身にも師走はそは〳〵と　（冬）
12　忘れ勝なる買物の数
13　月の出を気長にも待つ奥座敷　（秋）
14　盆過の経有難くなし　（秋）
15　勘当の詫も叶はず秋闌て　（秋）
16　筵戸破り這入痩犬　（秋）
17　此の里は花も豆腐も名残とや　（春）
18　草臥見せぬ畑打のふり　（春）

（注）
4 籬　粗い竹垣を言う。6愬　うったへ。



19 能く出来てものいいさうな雛の口　（春）　楽
20 御面奉行せよとすゝむる　菱
21 碁に負けて将棋に勝てば五歩と五歩
22 仲間部屋に鼾聞ゆる
23 貧乏は下た手に出てもふまれたり
24 流行らぬ醫者の落さるゝ髭
25 兎に角に堪忍袋ふくらせよ
26 明け易き夜も怠らぬ雉　（夏）
27 持たいろ流すな雨のかいつばた　（夏）
28 草鞋しめれば道の捗取
29 本意なくも月は梢にちょい隠れ　（秋）
30 近い砧に機嫌損ふ　（秋）
31 秋の行く際は何やら不自由に
32 大工左官も国の土ふむ　（秋）
33 隙過た隠居も今は閙敷
34 名古屋に家を持て以来
35 花の雲海原かけて横はる　（春）
36 眼の及ぶ丈菫蒲公英　（春）

（注）
27 かいつばた　かきつばた。杜若。燕子花。アヤメ科の多年草。29 本意かねてからの意向。もともとの意味の意。



明治三十六年三月十八日

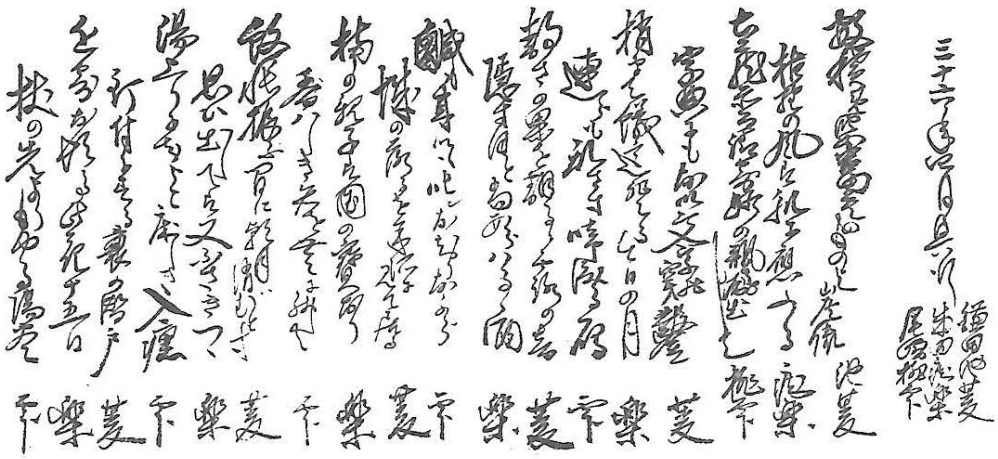
⑨「山に山」の巻

1 山に山重る雪の山路成　（冬）　痴楽
2 燈し替りに焚添る榾　（冬）　池菱
3 秋の暮からすも嗚呼と裸木に　（秋）
4 破れ芭蕉の巾の廣さよ　（秋）
5 ☾あれ〳〵と指さす月の登り際　（秋）
6 向ふの椽へ大股に飛
7ウ 何事も年頭丈け気の付て
8 駆落者を見遁してやる
9 風薫るまで待遠い掛り舟　（夏）
10 まどろむ間に馴れる早鮓　（夏）
11 国訛り笑ひほごれて縁と成
12 隙さへあれば覗く武者窓
13 ☾ふいと出て仲間入する月の宴　（秋）
14 仕舞むしろの露にしっとり　（秋）
15 澁鮎を喰ふて心も錆らかし　（秋）
16 家に傳はる鏡研する
17 ☽花咲てから来はじめた團子賣　（春）
18 一段高く飾る古雛　（春）

（注）
8駆落者　近世、庶民が無断で他郷に逃亡する者。10早鮓　酢でしめた魚肉と飯を交互に重ねて漬け、一夜または数日で食べられるやうにする鮓の総称。15渋鮎　落鮎。

19 宝蔵の戸前に蜂の巣を組で　（春）　菱
20 あらた館にあるじ居ぬかや　楽
21 左なきだに重き荷物を積運
22 公事に勝ても算盤に負け
23 姫百合の後向たるかけのよさ　（夏）
24 青簾から手まねきをする　（夏）
25 菓子盆の中へ小判を掴み出し
26 むかしゆかしき野袴のいろ
27 冬陣は和睦をしたも深き思慮　（冬）
28 強きを誉る鉢の寒菊　（冬）
29 月をふむ覚悟で立た定飛脚　（秋）
30 芒刈ても幽霊は居ぬ　（秋）
31 腸にひゞくやうなる秋の鐘　（秋）
32 祢宜を頼めば時待てという
33 生酔の我侭気侭繰返し
34 ぶしはしらねど高い挨拶
35 咲満て闇を動かす花の波　（春）
36 野辺も田畑も春の賑い　（春）

（注）
22公事　民事訴訟。裁判。29定飛脚　日を決めて定期的に定まった二地間を往復した飛脚。32祢宜　神職の一つ。通常、宮司または神主の次、祝［はふり］の上に位した。

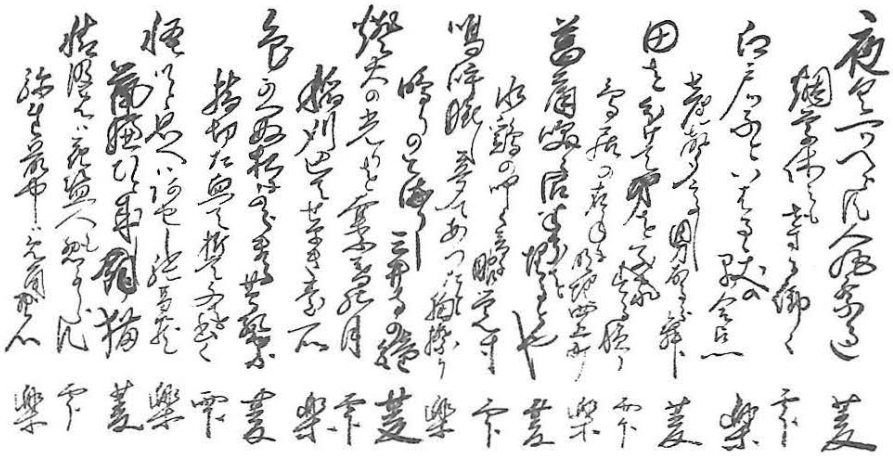


三十六年四月興行

⑩「数積めば」の巻

1 数積めば富貴のものよ炭俵　鎌田池菱
2 枯野の風は肌に應ふる　成田痴楽
3 土蔵普請奇妙の瓶を掘出して　尾崎桃雫（冬）
4 字典にもない文字の穿鑿　池菱（冬）
5 梢まで蟻這登る今日の月　痴楽（秋）
6 連らも乱さず啼渡る雁　桃雫（秋）
7 ウ 静さの果を翻る、露の音　菱楽（秋）
8 隠すほど尚あらはる、酒　楽雫
9 鹹も甘いも皆ンな知りながら　雫菱
10 城の落るを余所に見て居る　菱楽
11 楠の親子は国の寶なり　楽雫
12 香はしき名を世々に残して　雫菱
13 蚊帳振ふ間に朝月は消むとす　菱楽（夏）
14 思ひ出しては又ふさぎつ、　楽雫
15 湯上りにちらと床しき入瘧　雫菱
16 釘付にする裏の潜戸　菱楽
17 近寄るな頓而此十五日　楽雫（春）
18 杖の先よりもゆる陽炎　雫楽（春）

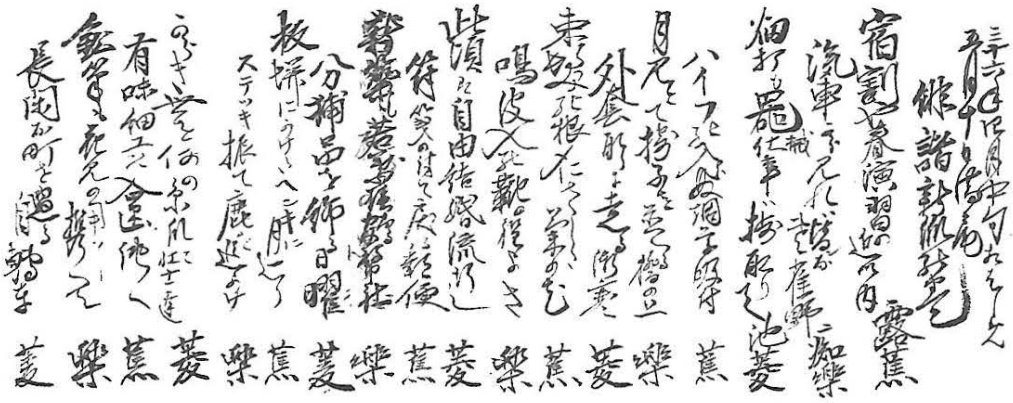
（注）11楠の親子　南朝の忠臣、楠正成、正行のこと。15入瘧　遊女などが誠意を示すため腕などに相手の名を入れ墨したもの。



19 夜具一つへらず人丸祭迄　（春）　菱
20 烟草休みもせずに働く　雫
21 江戸ッ子といはるゝ丈の早合点　楽
22 産聲高く男なるらむ　菱
23 田を分けて弟を別家する積り　雫
24 鳥居の右手に明地四五町　楽
25 菖蒲咲く沼半分を埋るとや　（夏）　菱
26 水雞の叩く音に眼覚す　（夏）　雫
27 嗚呼嬉し夢であったと胸擦り　楽
28 鳴りのとまりし三井寺の鐘　菱
29 燈火の光を奪ふ暮の月　（秋）　雫
30 稲刈込でせまき臺所　（秋）　楽
31 色かへぬ松にからまる蔦紅葉　（秋）　菱
32 指切た血で誓文を書く　雫
33 怪しいと思へばあやし張葛籠　楽
34 鼠嫌ひと成し飼猫　菱
35 情汲めば花盗人も恕すらん　（春）　雫
36 弥生最中は兎角野心　（春）　楽

（注）
19 人丸祭　旧三月十八日。柿本人麿呂の忌日。人麿呂忌。28三井寺　和歌山県にある西国巡礼の札所。紀三井寺。32誓文　神にかけて誓ふ誓約の文言。起請文。

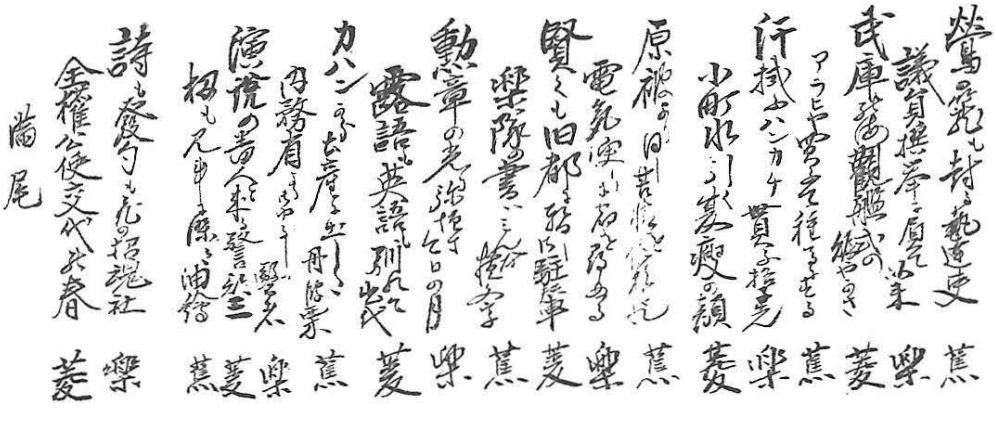
を示すため腕などに桂手の名を入れ墨したもの。



三十六年四月中旬相はじめ
五月十日満尾
⑪俳諧新派の巻

1 宿割や春演習の近い内　（春）露蕉
2 汽車から見れば皆ンな雲雀野　（春）痴楽
3 畑打も器械仕事は捗取りて　（春）池菱
4 パイプの入らぬ烟草吸付　蕉
5 月見とて椅子を並べる橋の上　（秋）楽
6 外套取に走る漸寒　（秋）菱
7 束髪の根〆にさした菊の花　（秋）蕉
8 鳴皮入の靴の程よき　楽
9 此頃は自由結婚流行し　菱
10 符箋の付て戻る郵便　蕉
11 新築も若葉陰なる官幣社　楽
12 分捕品を飾る日曜　（夏）菱
13 板塀にかけたペンキに月辷り　（秋）蕉
14 ステッキ振て鹿を追かけ　（秋）楽
15 からき世を何の糸瓜と壯士達　（秋）菱
16 有味細工の入歯誂らへ　蕉
17 鉛筆も花見の用に携へて　（春）楽
18 長閑な町を過る自転車　（春）菱

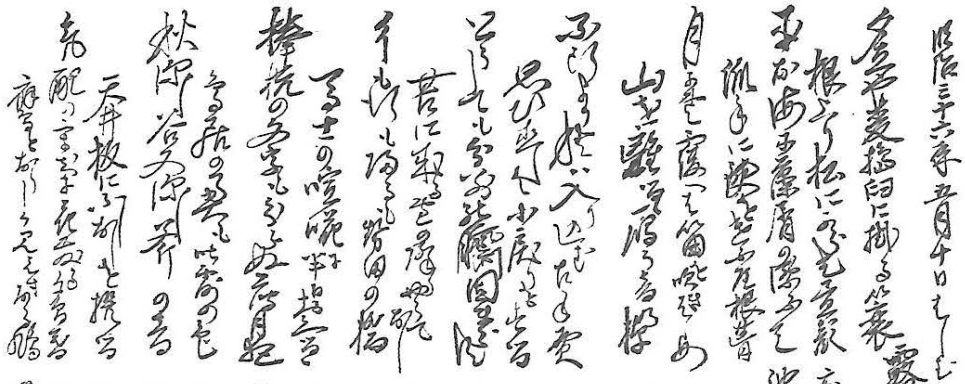
（注）
4入らぬ　要らぬの宛字。11官幣社　社格の一つで宮内省から幣帛を奉献した神社。
15壯士　自由民権運動の闘士。15有味　アルミニューム。21武庫　兵庫県の地名。



19 鶯の籠も封る執達吏　（春）　蕉
20 議員選挙に負て以来　楽
21 武庫の海観艦式の賑やかさ　菱
22 アラビヤ買ふて種馬にする　蕉
23 汗拭ふハンカチ貰ふ格子先　（夏）　楽
24 小町水引く夏痩の顔　（夏）　菱
25 原被より同じ苦情を依頼され　蕉
26 電気便りに宿を尋ぬる　楽
27 賢くも旧都に暫し御駐輦　菱
28 楽隊の書はみんな横文字　蕉
29 勲章の光弥増す今日の月　（秋）　楽
30 露語と英語も馴れて出代　（秋）　菱
31 カバンから土産に出した丹波栗　（秋）　蕉
32 内務省よりおゆるしの醫者　楽
33 演説の番人と成る警部三　菱
34 扨も見事に染た油繪　蕉
35 詩も發句も花の招魂社　（春）　楽
36 全權公使交代の春　（春）　菱

満尾

（注）
22アラビヤ　乗用馬の品種。アラブ種。アングロアラブ種。25原被　原告と被告のこと。27旧都　ここでは京都のこと。30出代　①交代②出替わり奉公のものが年季を終えて交代すること。32内務省　戦前警察・地方行政などを統括した中央官庁、昭和22年廃止。

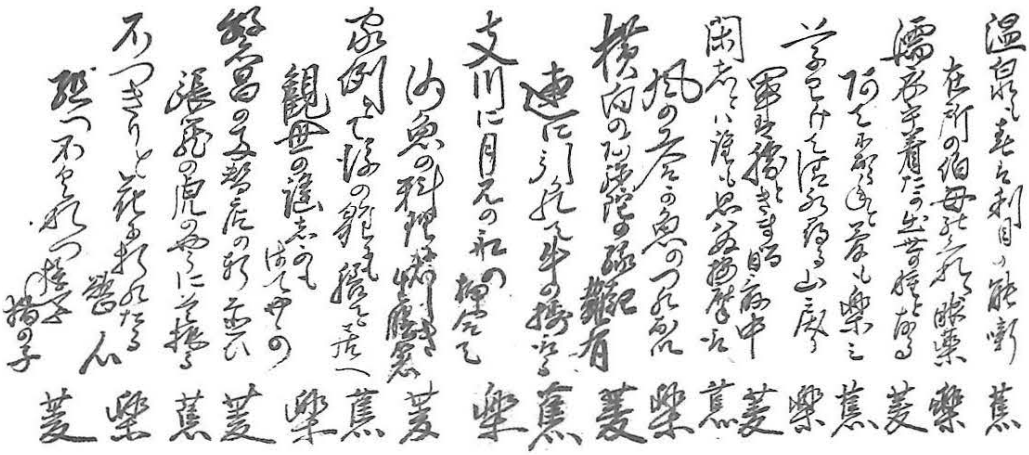


明治三十六年五月十日はじむ

⑫「夕立や」の巻

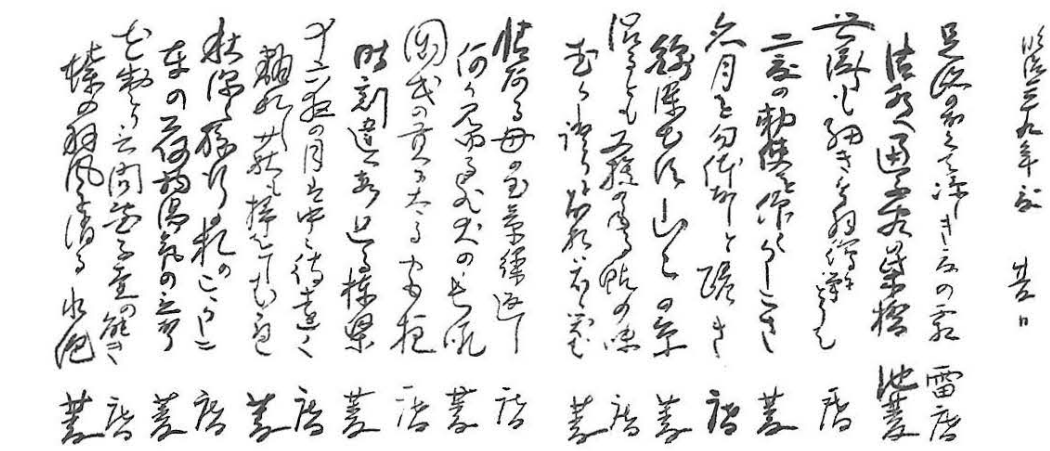
1 夕立や麦搗臼に掛る簑　（夏）露蕉
2 根上り松にからむ昼顔　（夏）痴楽
3 平な海に藻屑の漂ふて　池菱
4 派手に鋏を遣ふ屋根葺　蕉
5 ☾月が雲覆へば笛を吹きはじめ　（秋）楽
6 山を離るゝ雁が音の棹　（秋）菱
7ウ 不断より秋は入り込むたね賣　（秋）蕉
8 思ひ直して小戻りをする　楽
9 どうしても分別の臍固まらず　菱
10 苦になる雪の降りやうでなし　（冬）蕉
11 彳も行も帰るも勢田の橋　楽
12 馬士の喧嘩に半日おくるる　菱
13 ☾棒杭の文字も分らぬ薄月夜　（秋）蕉
14 鳥居の奥も吐霧の色　（秋）楽
15 秋深し谷又深し斧の音　（秋）菱
16 天井板にふしなしを撰る　蕉
17 ☾気配のうちに花散る夕間暮　（春）楽
18 鷹となりしか見えずなる鳩　（春）菱

（注）12馬士　馬方。18此の句は「鷹化して鳩となる」という仲春の季語を踏まへる。



19 温泉も春は利目の能噺（春）　蕉
20 在所の伯母のくれた眼薬　楽
21 濡衣を着たが出世の種となる　菱
22 あてにならねど夢も楽み　蕉
23 草わけて清水尋る山戻り（夏）　楽
24 軍は勝ときまる目算　菱
25 閑者とは誰も思はぬ按摩度　蕉
26 風の工合か魚のつれない　楽
27 横向の阿弥陀の縁起難有　菱
28 連に引かれて牛の捗どる　蕉
29 支川に月見の船の押合て（秋）　楽
30 沙魚の料理にほしき生膾箸（秋）　菱
31 家例とて後の雛にも膳を居へ（秋）　蕉
32 観世の謡しかもはでやか　楽
33 繁昌の両替店の軒並び　菱
34 張籠の虎のやうに首振る　蕉
35 ぽっきりと花に折れたる慾心（春）　楽
36 組ずほぐれつ遊ぶ猫の子（春）　菱

（注）
20在所　村里。ゐなか。25「間者とは誰も思はぬ按摩旅。」31居へ　契沖暇名遣ひなら「据ゑ」とすべきところ。

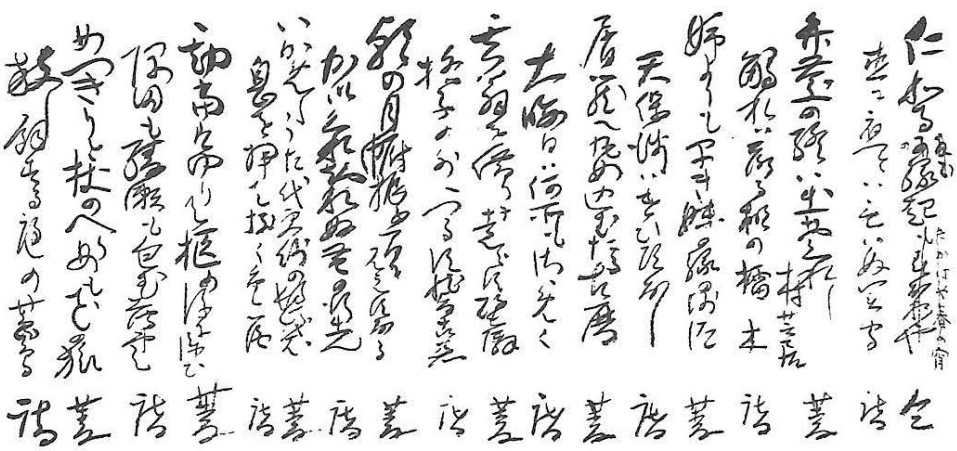


明治三十九年度夏日

⑬「足跡」の巻

1 足跡のなくて涼しき夏の霜　（夏）雷庵
2 清水へ通ふ谷の柴橋　（夏）池菱
3 世渡りも細き鳥羽絵に筆とりて　庵
4 二度の勅使を仰ぐかしこさ　菱
5 名月を勿体なしと跪き　（秋）庵
6 錦染出す山々の景　（秋）菱
7ウ 澁るとも又捨かねる鮎の味　（秋）庵
8 むかし語りになればほゝ笑む　菱
9 情ある母の玉章繰返し　庵
10 何が見ゆるか犬の長吼　菱
11 国民の貢に太る宮柱　庵
12 時刻違へず廻る棟梁　菱
13 十六夜の月は中々待遠く　（秋）庵
14 翻れし萩も掃をしむ庭　（秋）菱
15 秋深し旅行の札のこゝかしこ　（秋）庵
16 車の荷物湯気の立なり　菱
17 花盛り言問団子賣の能き　（春）庵
18 蝶の羽風に消る水泡　（春）菱

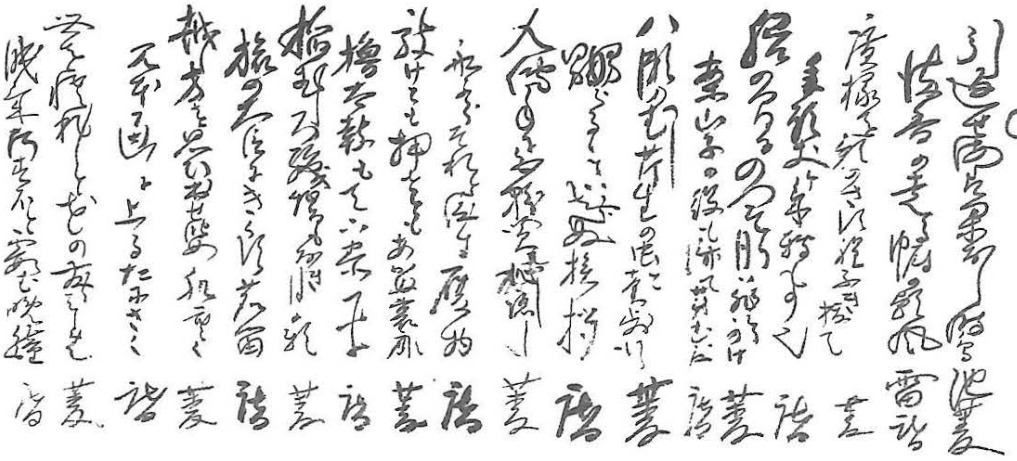
（注）
9 玉章　タマアズサの約。立派な文章。他人の手紙を敬って言ふ。13 十六夜陰暦十六日の夜。17 言問団子　江戸の隅田川の堤辺にある名所の団子。



19 仁名寺の縁起きかばや春の宵　（春）　菱
20 直に應とは言はぬ関守　庵
21 弁慶の終い出おくれし村芝居　菱
22 觸れば落る棚の擂木　庵
23 姉よりも早き妹の縁の沙汰　菱
24 天保銭は遣ひ道なし　庵
25 屑籠へ丸め込むだる古暦　（冬）　菱
26 大晦日は何所もさざめく　（冬）　庵
27 玄翁を借りに走らす壁隣り　菱
28 格子の外へつるす稽古着　庵
29 朝の月蚊帳振ふ間に見えずなる　（夏）　菱
30 かいくれ知れぬ蚤の行先　（夏）　庵
31 いかめしう古代更紗の髭袋　菱
32 息を押て抜く金箔　庵
33 勘当はよりて柩の後に添ひ　菱
34 隅田も綾瀬も包む薄雲　庵
35 めつきりと杖のへりめも花の旅　（春）　菱
36 放し飼する庭の黄鳥　（春）　庵

（注）
24 天保銭　天保年中に鋳造された銅銭。明治二十年まで通用。時勢遅れやおろかな者をあざけって言ふ語。27玄翁　玄能。頭の両端にとがりのない金槌。29蚊帳　蚊帳。31髭袋　長い髭の人が冬期髭を入れて耳より吊り置く袋。

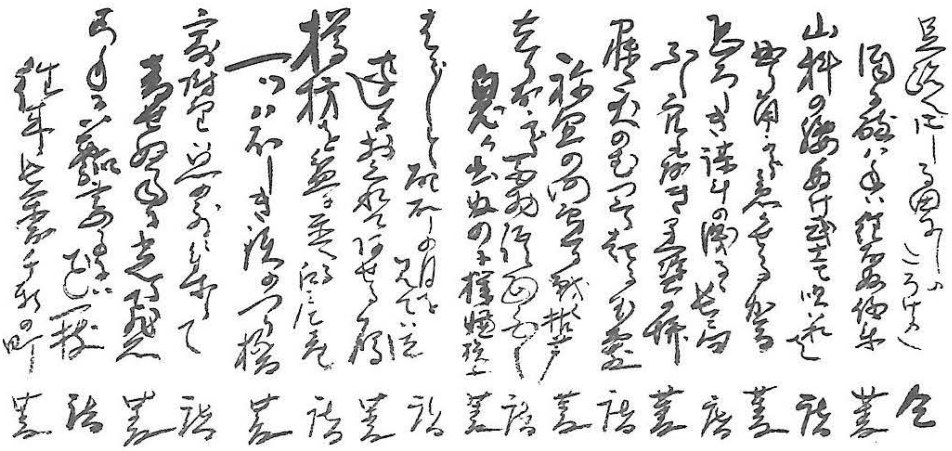
子。



⑭「引返せ」の巻

1 引返せ海は果なし時鳥　（夏）池菱
2 波香の走る軒の朝風　（夏）雷庵
3 廣椽を影のさす程ふき抜て　菱
4 年頭丈け気転ものなり　庵
5 ☾ 膳の間にのっそり月は登りかけ　（秋）菱
6 案山子の役も済で芽出度　（秋）庵
7 ウ 八瀬のむし芹生の虫と賣歩行　（秋）菱
8 嬲らるゝとは知らぬ挨拶　庵
9 人伝手に白粧買も秘し隠し　菱
10 船からそれと渡す履物　庵
11 敲けども押せどもあかぬ裏扉　菱
12 櫓太鼓も天下泰平　庵
13 ☾ 稲むしろ織端もなき月の影　（秋）菱
14 旅の大臣にきかす鹿笛　（秋）庵
15 越し方を思ひ出せば肌寒く　（秋）菱
16 見本通に上るたんざく　庵
17 ☽ 世を悟れ〳〵と花の散りはじめ　（春）菱
18 眠気さすほど霞む晩鐘　（春）庵

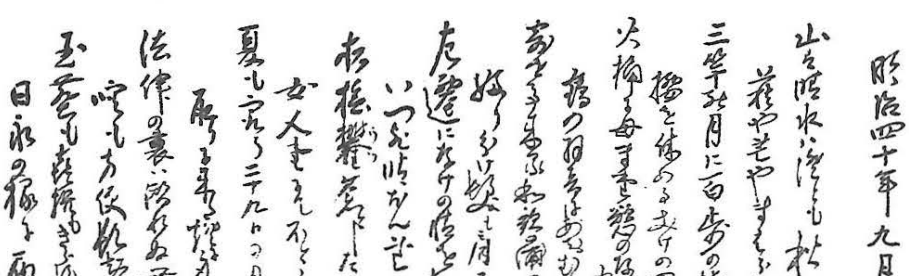
（注）
3 廣椽　寝殿造りの廂の間。幅の広い縁側。4 年頭　仲間の中で最も年齢の多いこと。また、その人。13 稲むしろ　稲の面のむしろのようなものを言う。



19 足跡へにじる田にしのころげ込　（春）　仝
20 酒に酔はねば往かぬ伯楽　菱
21 山科の腰抜武士と唄はれて　庵
22 曲り角から急がせる駕　菱
23 恐ろしき謀計の洩るゝ長局　庵
24 ふし穴もなき黒塗の塀　菱
25 寝た犬のむっくり起る玉霰　（冬）　庵
26 祢宜の門邉に戦ぐ枯芦　（冬）　菱
27 去りながら百物語面白し　庵
28 鬼が出ぬのに機嫌損ふ　菱
29 はら〳〵と配所の月を見ては泣　（秋）　庵
30 連におくれてあせる雁　（秋）　菱
31 樽柿を盆に並べる江戸土産　庵
32 一つはほしき鉄のつり橋　菱
33 寄附金は思の外に集りて　庵
34 音せぬ雨に光る飛石　菱
35 弓手には瓢妻手には花一枝　（春）　庵
36 往来長閑な千軒の町　（春）　菱

略（于時に明治三十有九年夏日興行）

（注）
20 伯楽　馬喰。①馬のよしあしを見わけたり、病気を治したりする人。②牛馬の売買や周旋する人。23長局　宮中や大奥で長い一棟の建物をいくつもに仕切った女房などの部屋。35妻手　馬手、右手。

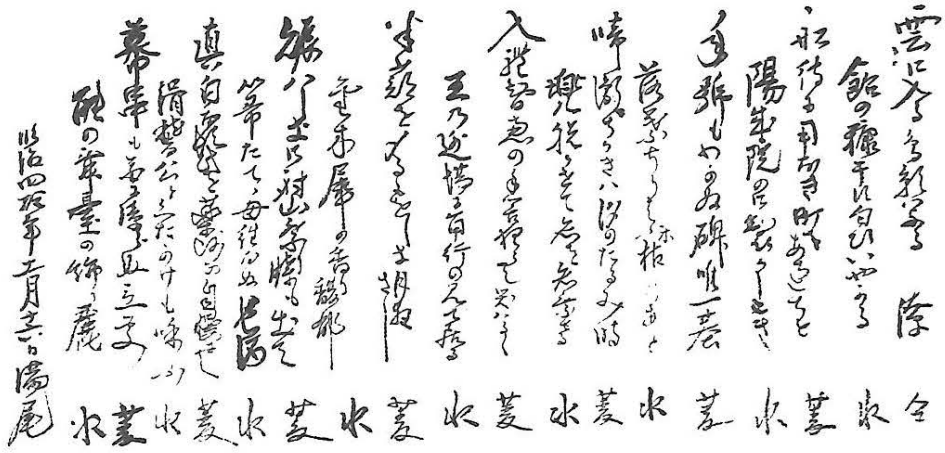


明治四十年九月はじむ

⑮「山は晴れ」の巻

1 山は晴水は澄とも秋の暮れ　（秋）　娯水
2 萩や芒やまばらなる道　（秋）　池菱
3 三竿の月に百歩の杖曳て　（秋）　水
4 腰を休める丈けの四阿屋
5 火桶にもまた慾のなき小春空　（冬）　水
6 鶴の羽音にあきむしのたつ　（冬）　菱
7ウ 寄せて来る和歌の浦回の片男波　水
8 ふり分け髪も肩過る頃
9 左遷になけの情を打かこち　水
10 いつぞ晴なん雲の通路　菱
11 杉檜鬱蒼とした山續　水
12 女人堂にてほどく麺桶　菱
13 夏も窮り二十九日の月痩て　（夏）　水
14 取りに来た燈に身をとかす虫　（夏）　菱
15 法律の裏は潜れぬ世の中に　水
16 嘘も方便頓智即妙　菱
17 玉莖も喜撰もきらず花盛り　（春）　水
18 日永の椽に届く小包　（春）　菱

（注）
3三竿　竿三本つなぎあわせた程の高さの意。日月が空のかなり高い所にあること。4四阿屋　東屋。7片男波　赤人の「渇を無み」を片男波にこじつけてできた語。高い波。12麺桶　麺桶のこと。



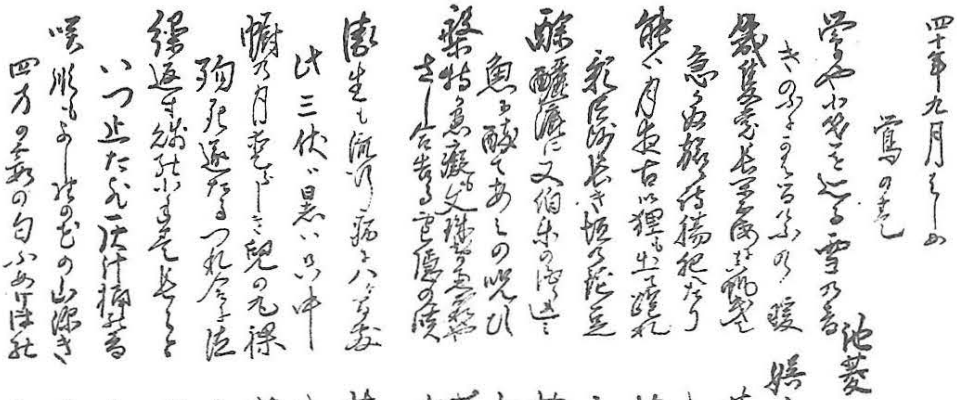
19 雲に入る鳥影写る潦　仝
20 飴の糠干す匂ひいやがる　水
21 船待に用なき町をあちこちと　菱
22 陽成院の御製かしこき　水
23 年號もわかぬ碑唯一基　菱
24 落葉ちりばふ木枯のあと　水　（冬）
25 啼鵙ちかきは汐のたるみ時　菱　（冬）
26 兜脱がせて名を名乗せる　水
27 入れ智恵の手筈狂うて笑はる、　菱
28 王の逃場に角行の見て居る　水
29 半蔀をメるもをしき月夜さし　菱　（秋）
30 金木犀の香り馥郁　水　（秋）
31 賑はしき御射山祭り蝶も出て　菱
32 箒たて、も往かぬ長酒　水
33 真白な髭を薬師の自慢にて　菱
34 滑稽公とくたかけも呼ぶ　水
35 幕串も花に障らぬ立處　菱　（春）
36 能の舞臺の飾り麗　水　（春）

明治四拾年十一月十六日満尾

（注）

19 潦　路上のたまり水。22 陽成院　第五十七代天皇。百人一首に「筑波嶺の峰より落つるみなの川恋ぞつもりて渕となりぬる」

29 半蔀　戸の一種。31 御射山祭　八月二十七日（昔は陰暦七月二十七日）の信州諏訪御射山神社祭。34 くたかけ　鶏の古称。百済家鶏

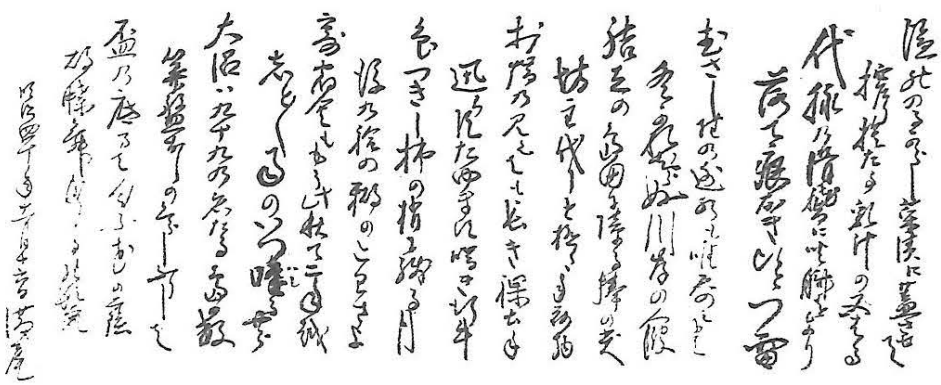


四十年九月はじめ

⑯鶯の巻

1 鶯や小笹を辷る雪の音　（春）　池菱
2 きのふとかはるけふの暖　（春）　娯水
3 幾隻も長閑な海に真帆曳て　（春）　菱
4 急がぬ旅に詩腸肥へたり　　水
5 能い月夜古い狸も出て躍れ　（秋）　菱
6 影法師長き垣の鉈豆　（秋）　水
7ウ 酴醾漉に又伯楽の泊り込み　（秋）　菱
8 魚に酔てあみの呪ひし　　水
9 槃特の愚痴も文殊の智恵なれや　　菱
10 さし合告る雪隠の咳　（冬）　水
11 衛生も流行病に八ケ間敷　　菱
12 此三伏は暑い只中　　水
13 蚺の月愛らしき兒の丸裸　（夏）　菱
14 殉死遂たるつれ合に泣　（夏）　水
15 繰返す賤の小手巻長々と　　菱
16 いつ止たぞ灰汁桶の音　（春）　水
17 咲順もよし野の花の山深き　（春）　菱
18 四方の霞の匂ふあけぼの　（春）　水

（注）9 槃特の愚痴も文殊の智恵　槃特の愚かさも文殊も智恵も相対的な差異でしかなく悟りの立場からみて同等であること。



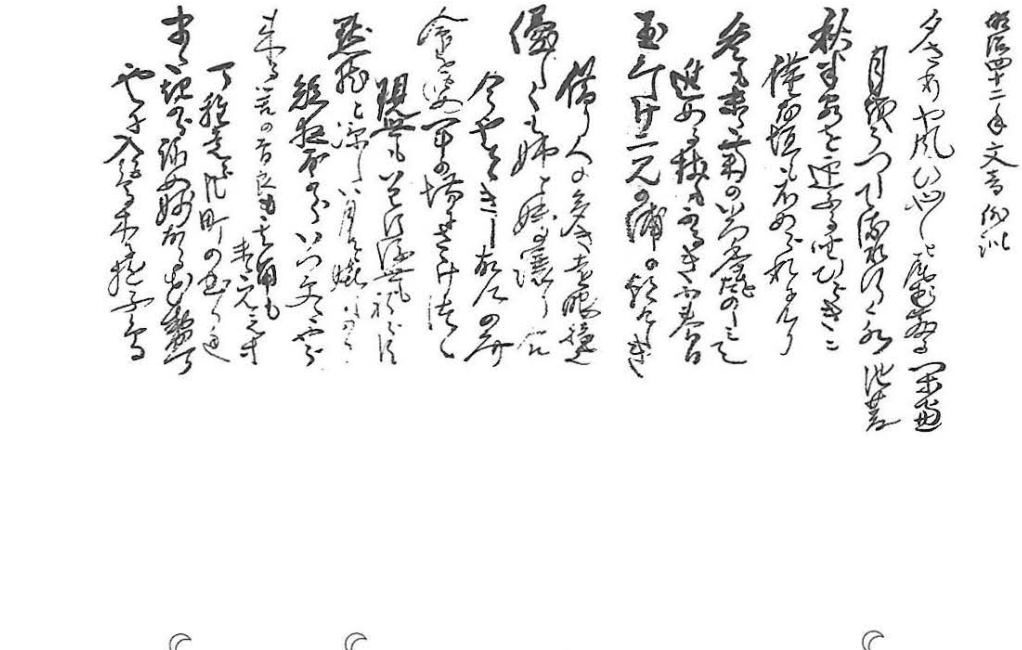
12三伏　夏の土用。夏の土用は初伏、中伏、末伏に分けられる。15賤の小手巻　古代の布「倭文」を織るのに使う「苧環」。「繰り返し」や「ひやし」の序詞に用いる。（「伊勢物語三十二」）

19 塩ののるからし菜漬に蓋させて　（春）　仝
20 搾り捨てたる乳汁の又はる　菱
21 代脉の滑稽に皆臍をより　水
22 落て痕なきひとつ雷　（夏）　菱
23 むさし野の逃水も唯てのみにて　水
24 冬がれ知らぬ川岸の人波　（冬）　菱
25 結立の島田に障る棒の尖　水
26 坊主代りと遊た手荷物　菱
27 村端の見えても長き裸土手　水
28 迅かずたゆまず喘ぎ行牛　菱
29 色づきし柿の梢に残る月　（秋）　水
30 後の袷の糊のこわさよ　（秋）　菱
31 寄宿舎ももう此秋で二年越　（秋）　水
32 しと〳〵雨のいつ晴るやら　菱
33 大沼は九十九の名たる島の数　（秋）　水
34 算盤なしのくらしぶりして　菱
35 盃の底まで匂ふ花の蔭　（春）　水
36 胡蝶舞ふなり馬の鬣　（春）　菱

明治四十年十一月十六日満尾

（注）

21 代脉　脉は脈の異体字。代診。26遊た　「言うた」の宛字。

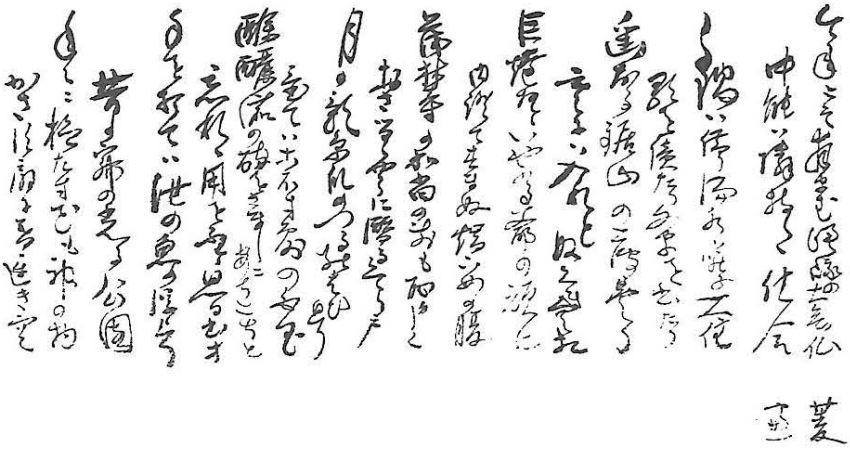


明治四十二年文音俳諧

⑰「夕さりや」の巻

1 夕さりや風ひや〳〵と尾花散る　（秋）　閑窓
2 月をうつして流れ行く水　（秋）　池菱
3 秋半客を迎ふる座ひらきに　（秋）
4 僅な垣もほめられにけり
5 冬もまだ菊のいろ香をたのしみて　（冬）
6 進める杖もかるき小春日　（冬）
7ウ 玉くしげ二見の浦の朝げしき
8 借り人の多き遠眼鏡なり
9 優しくも姉と妹の譲り合
10 今やとときし在郷の弁
11 命をば軍の場にさゝげつゝ
12 現世もいはず浮世も祈らず
13 黙然と涼しい月を嬉しがり　（夏）
14 短夜ながらいつ更たやら　（夏）
15 来る筈の曾良も其角も未だ見えず
16 丁稚走らす町の戻り通
17 まだきから詠め妙なる花盛り　（春）
18 雲に入る鳥木に遊ぶ鳥　（春）

（注）
7玉くしげ　玉櫛笥　明け、ふた、おく、おおふなどの枕詞。10今やとときしは、「今やと説きし」「今や届きし」と両様に読める。



19 今年こそ拝まむ嵯峨の大念仏　（春）　菱窓

20 中能い隣持た仕合

21 鍋は借り湯水は囃子一人住

22 額と讀だり文字を書たり

23 遙なる鋸山の薄曇り

24 寒には入れとぬくき空相　（冬）

25 炬燵などいやがる爺の頑に　（冬）

26 内燈ですまぬ端下女の腹

27 茂林寺の和尚の前も恥かしく

28 おさるゝ雲に潜るくゞり戸

29 月の影糸瓜のつるのはひ廻り　（秋）

30 置てはこぼす露の白玉　（秋）

31 餘醺漉の酔いをさましにあちこちと　（秋）

32 忘れた用をふと思ひ出す

33 手を打てば池の魚の浮上り

34 昔の寂の光る公園

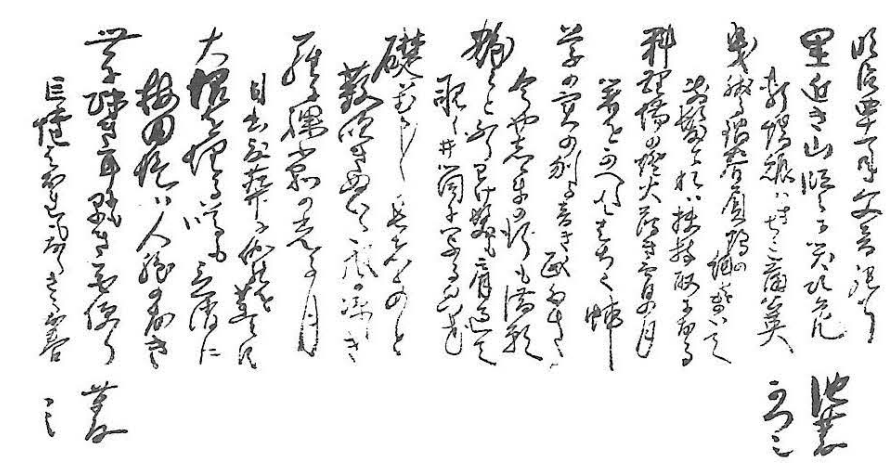
35 年々に植たす花も神の物　（春）

36 かざす扇に暮遅き空　（春）

（注）

19 嵯峨の大念仏　四月十一日から十五日まで京都嵯峨清涼寺釈迦堂でおこなう融通念仏会。十一、十三、十五の三日間は堂上で無言狂言を行う。

23 鋸山　房総半島にある山。27 茂林寺　群馬県舘林にある曹洞宗の寺院。文福茶釜を所蔵することで名高い。

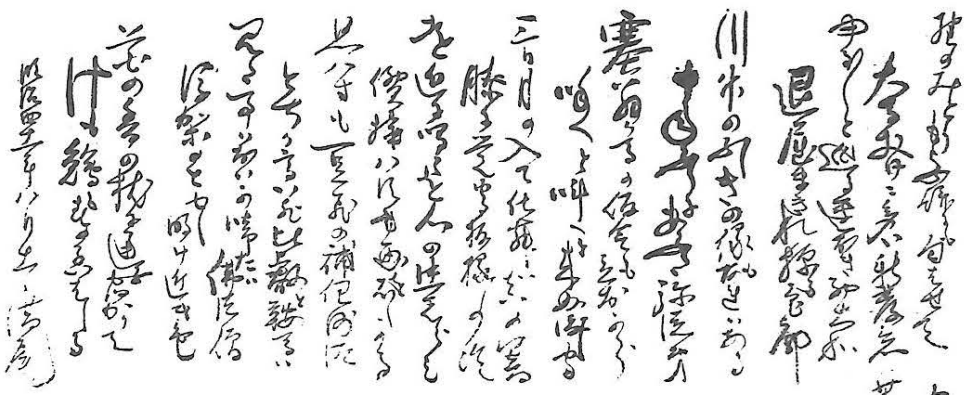


明治四十一年文音施行

⑱「里近き」の巻

1 里近き山段々に笑ひ皃　（春）　池　菱
2 軒場賑はすちゝこ蒲公英　（春）　かつミ
3 曳残る鐇背負鶴の餌をまいて
4 前髪とれば扶持取になる
5 料理場の燈火薄き宵の月　（秋）
6 箸をかえしてはぢく唇　（秋）
7ウ 草の実の刎る音きく面白さ
8 今やしじまの行も満願　（秋）
9 艶々とふり分け髪も肩過て
10 覗く井筒に写る皃花
11 礎はむかし〳〵の長者あと
12 藪吹きぬいた風の涼しき　（夏）
13 羅に裸小判の光る月　（夏）
14 目出度葬に伽羅を熏らす
15 大沼を埋る噂も立消に
16 梅田堤は人絶のなき
17 世に疎き耳にも早き花便り　（春）　菱
18 巨燵ばなれもなりそうな春　（春）

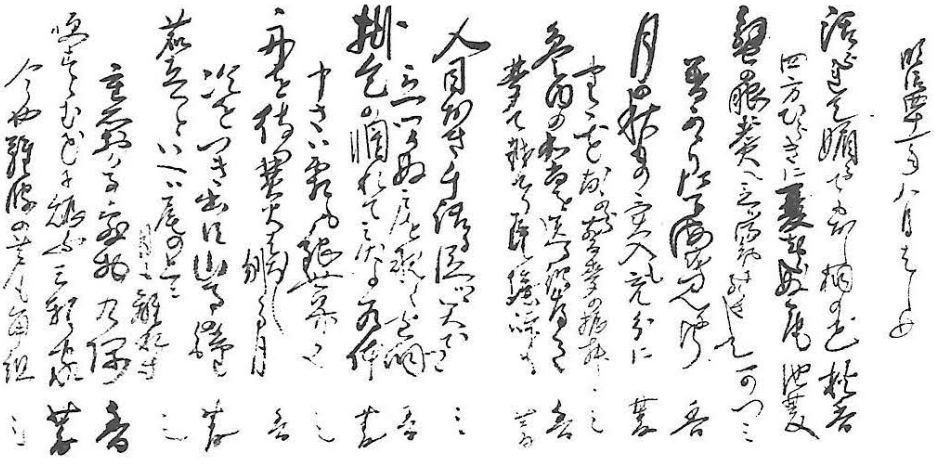
（注）
2ちちこ　父子草。3鐇　ちょうな。10皃花　皃＝貌＝顔。顔花。植物の名。昼顔、カキツバタなど諸説あり。美しい花の意とも。



19 野のみどりもらふ餅にも匂はせて　（春）
20 大寺丈けに多い新発意　仝
21 ゆる〳〵と巡る連なき初大和　菱
22 退屈まぎれ探る色廓
23 川竹のふしぎの縁もあればある
24 十年ぶりにあふ孫従弟
25 塞翁が馬の仮令も立ながら
26 呼べど叫べど来ぬ渡し守
27 三日月の入て仕舞ば真の闇　（秋）
28 膝に覚ゆる板椽の冷　（秋）
29 遠近に鳴くを心の虫しらみ　（秋）
30 價構はず書画をほしがる
31 思はずも一足飛の補任沙汰
32 どちが高いぞ比叡と鞍馬は　（夏）
33 見たことはないが啼たは佛法僧
34 後架のともし明け近き色
35 花の香の杖に通る宿かりて　（春）
36 汁も鱠も春の香はしる　（春）

明治四十一年八月十一日満尾

（注）
20新発意　新しく仏門に入ったもの。23川竹　官許の郭以外の遊里の異名。「川竹の」は「ふし」「よ」「ながれ」にかかる枕詞。25塞翁が馬　人間の禍福は変転し定まりのないもだというたとへ。34後架　禅寺で僧堂の後ろに設けた手洗場。また、その傍に便所もあったことから、便所のこと。

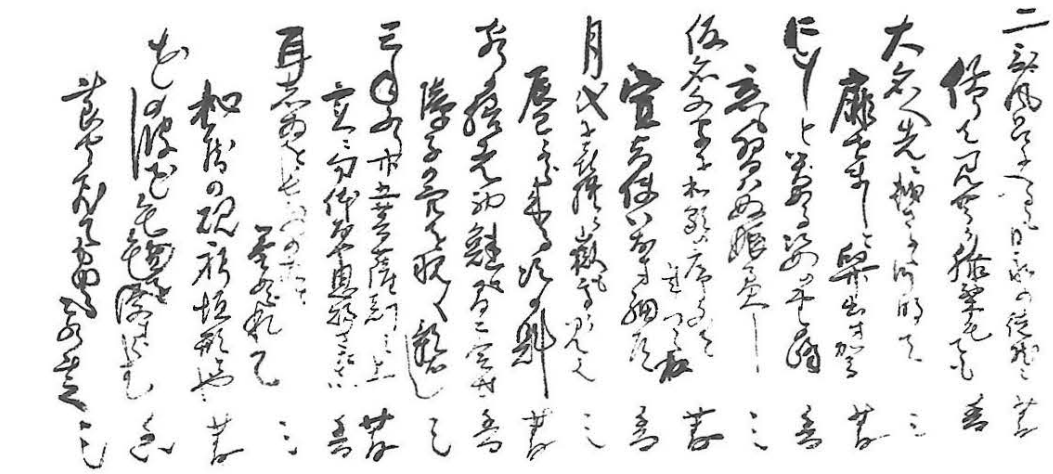


明治四十一年八月はじめ

⑲「活られて」の巻

1 活られて媚るでもなし桐の花　（夏）秋香
2 四方ひらきに夏知らぬ庵　（夏）池菱
3 蟹の眼の煮へ立つ湯気に水さして　かつミ
4 暮かゝりたる海を見に行　香
5 月の秋もの、実入も充分に　（秋）菱
6 まだ花ながら蕎麥の振舞　（秋）ミ
7 参内の和尚を送る彼岸過　（秋）香
8 夢で越けり薩摩峠も　菱
9 人目なき手話に泣つゝ笑ひつゝ　ミ
10 立聞ぬ戸を覗く雪洞　香
11 掛乞の慍れて戻る有体　菱
12 中さい霜も銀世界なり　（冬）ミ
13 舟を待つ焚火ぱち〳〵刎ねる月　（冬）香
14 冷をつき出す山寺の鐘　（冬）菱
15 荒立つといへば尾の上に目も離れず　ミ
16 重石おかるゝ敷物の閉　香
17 咲すゝむ花に賑ふ三軒家　（春）菱
18 今や難波の芦も角組　（春）ミ

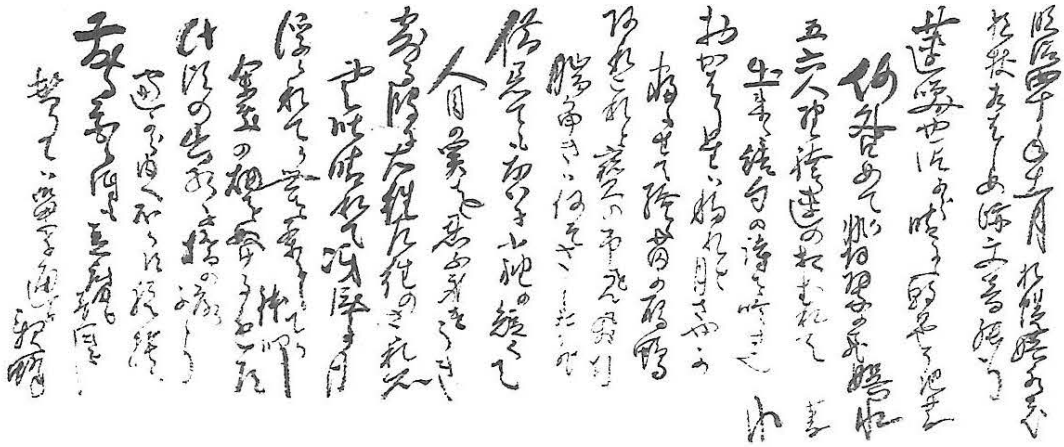
（注）
11掛乞　掛取。12中さい　中祭。大祭に次ぐ祭り。歳旦祭、元始祭など。
18角組　芦の生えて出る時は牛の角のよふである。組は芽ぐむの意。



19 二度風呂に入るも日永の徒然に　（春）　菱
20 借りて見やうか膝栗毛でも　香
21 大名へ先に越さるる川明て　ミ
22 扉せましと舁出す駕　菱
23 にこ〳〵と笑める姿の雲の峰　（夏）　香
24 恋も習はぬ娘美し　ミ
25 仮名文字に和歌の序文を書つらね　菱
26 宣旨使いなす細道　香
27 月代に喜撰が嶽も高く見え　（秋）　ミ
28 辰巳から来る冷の魁　（秋）　菱
29 客の膳先初鮭で間に合せ　（秋）　香
30 障子の穴を覗く影ぼし　（冬）　ミ
31 三年ぶり廿五菩薩刻み上　菱
32 実に勿体なや恩賜ざたとは　香
33 耳しゐを長寿の相と誉められて　ミ
34 秘蔵の硯躬垣形とや　菱
35 花の波花毛氈を浸すらむ　（春）　香
36 莫火飛でもゆる若芝　（春）　ミ

（略）四十二年五月満尾

（注）
20膝栗毛　徒歩で旅行すること。26宣旨の使いなす　勅旨の伝達をする使者を去らせる。追い払う。27喜撰が嶽　京都府にある山。33耳しゐ　耳が聞こえないこと。又、その人。34躬垣　御垣。宮中、神社など神聖な場所の周囲にある垣。

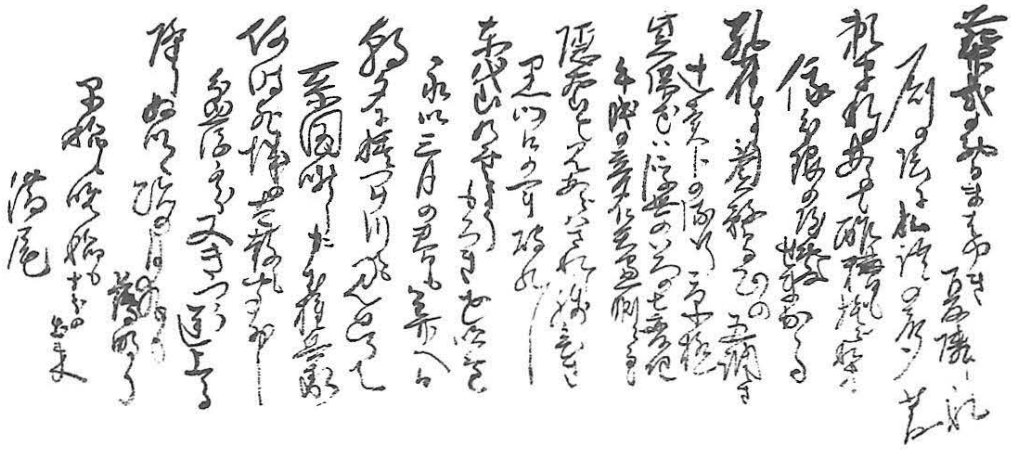


明治四十一年十一月札幌娯水老
遊杖相はじめ跡文音張行

⑳「蓮咲や」の巻

1 蓮咲や沼から晴る、朝曇り　（夏）池菱
2 何咎めてか翡翠の飛　（夏）娯水
3 五六人野袴連の相むれて　菱
4 出来た結句の詩を吟ずなり
☾5 打かはり星は移れど月さやか　（秋）
6 寝もせで騒ぐ苗の雁鴨　（秋）
7ウ あれこれと寶の市を見てお行
8 揚角きは何ぞさしたぞ　（秋）
9 借着でもないに小袖の短くて　（夏）
10 人目の関を忍ぶ身をうき
11 寄る波に右往左往のさゞれ石
☾12 雲吐晴れて冴渡る月　（冬）
13 浮かれてか世を祭りてか鉢叩　（冬）
14 余處の畑をぬける近道
15 此頃の出水に橋の落ちかゝり　（夏）
16 窓から内へほかす脱捨
☽17 散る花に酒も豆腐も賣きらし　（春）
18 替りては巣に通ふ親蜂　（春）

（注）
7寶の市　十月十七日、大阪の住吉神社で行う市。枡市とも言う。13鉢叩き　十一月十三日の空也忌から大晦日までの四十八日間、

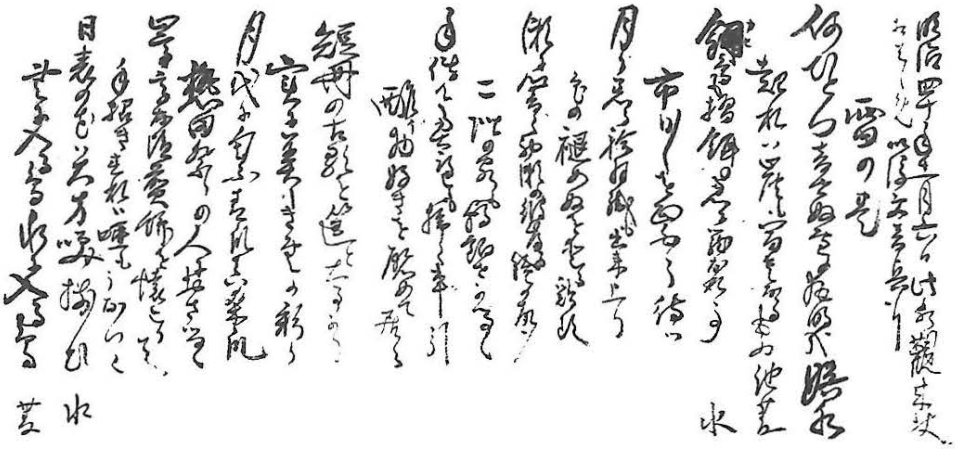


空也堂の僧が京都市内外を巡り歩いて竹の枝で瓢箪を鳴らして念仏和讃を唱えること。

19 葬式の西日まばゆき夏隣　（春）　水
20 厠の陰に私語の聲　菱
21 頼まれのあるので酢糟も捨てられず
22 俄分限の屋敷せまがる
23 孔雀より鵞鷲正の五調子さ
24 辻賣卜の流行京極
25 紫陽花は浮世のいろの七変化　（夏）
26 午眠の夢に天窓刺々る、　（夏）
27 隠密と見あらはされし残念さ
28 黒門口の軍破れし
29 東岱の雲よりもろき花吹雪　（春）
30 永い三月の春も算へ日　（春）
31 朝夕に種つけ川を見廻りて
32 系図嘶しに力む権兵衛　（春）
33 何時ぞ城の太鼓も聞外し
34 盆後から又きつう逆上る
35 降りぬいた跡の月夜の薄明り　（秋）
36 早稲も晩稲も十分の出来　（秋）

満尾

（注）23解読が困難、一応の読みは書いたが自信なし。29東岱　秦山の別名。五岳のうち東方にあるので此の名がある。31種つけ　種浸し。

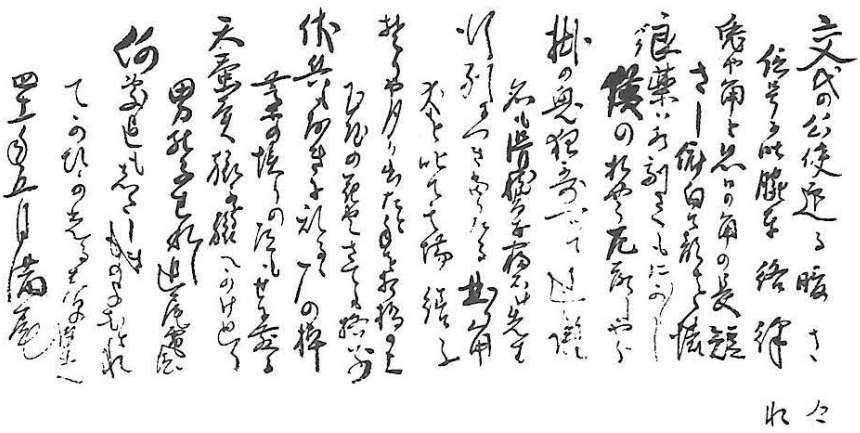


明治四十年十一月六日此水観来杖
相はじめ以後文音興行

㉑雪の巻

1 何ひとつ音せぬ雪の夜明かな　（冬）　娯水
2 起れば崖も富貴なるもの　池菱
3 飼鳥も摺餌の恩に籠なれて　水
4 市日〳〵を面白う待つ
5 ☾月に着る袷羽織も出来上り　（秋）
6 色の褪めぬを愛る無蹤　（秋）
7ウ 瀬に闇に初瀬の彼岸の鈴の聲
8 二階の客も朝餉せかる、
9 手傳て奥庭も掃く車引
10 酢い物好きを慰めて居る
11 短冊の古歌を筐と大事がり
12 実に美しき雲の彩り
13 ☾月代に匂ふ青瓜真桑瓜　（夏）
14 熱田祭りの人におさる、
15 崇高な塩前餅を懐こりて
16 手招きすれば唖もうなづく
17 ☾目表の花は大方咲揃ひ　（春）　水
18 雲に入る鳥水に入る鳥　（春）　菱

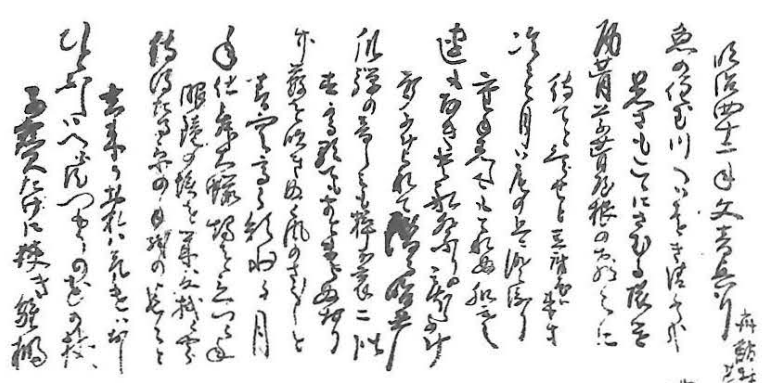
（注）
7初瀬　初瀬山の山腹に「長谷寺」がある。14熱田祭　六月十四日、近村から山ほこを出す。



19 交代の公使迎る暖さ　（春）　仝
20 伝号に吐腕車絡繹　　水
21 兎や角と思いの角の長短
22 さし俯向て顔を懐
23 良薬は水割さへもにが〳〵し
24 漠の礼やら厄落しやら　（冬）
25 掛の鬼狂歌一つで追儺
26 名も滑稽な寝ぼけ先生　（冬）
27 行列につき当りたる曲り角
28 犬を叱て其場繕ふ
29 そりや月は出たと手を打橋の上　（秋）
30 玉屋の花火さても格別　（秋）
31 伏兵もなきに乱るゝ厂の棹
32 葉の埃りの道もせに散る　（秋）
33 天蚕賣旅から旅へかけ廻り
34 男の子生れし追尾電報
35 何處迄もしたしきものよ花と水　（春）
36 てかひが光る春の後光　（春）

四十一年五月満尾

（注）
20「腕車」　人力車。絡繹　人馬などが次々と続いて絶えないさま。21 思いの角　「角」の字を「かく」とよませて「思いを懸く」とも解することもできる。「つの」とよませて「思い募る」の意と、女性の「嫉妬」の意と掛けていると解する。36 寝ぼけ先生　江戸中後期の狂歌師・戯作者太田南畝（一七四九～一八二二）の狂号。蜀山人・四方赤良の別号あり。36てかひがは漢字を嵌めると、「手飼ひが」か。「てかてか光る春の汐先」とも読める。

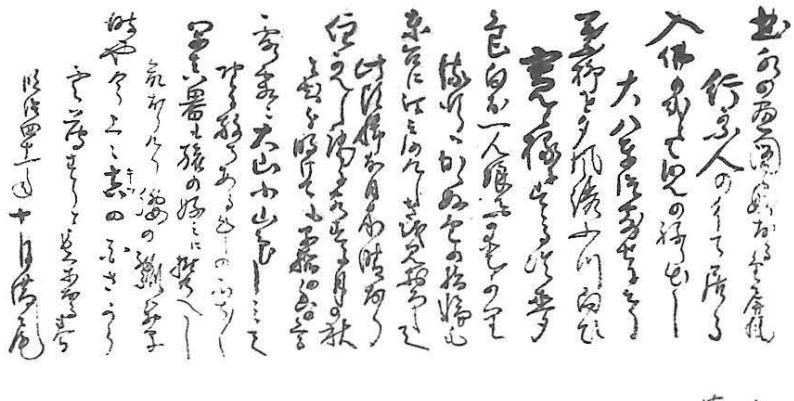


明治四十二年文音興行　　上州館林　荒井氏

㉒「魚の住む」の巻

1 魚の住む川へは遠き清水哉　（夏）　池菱
2 暑さもここにさむる隈笹　（夏）　閑窓
3 瓦葺草葺屋根の飛々に
4 待てどくらせど豆腐屋は来ず
5 冷々と月は尾の上に澄渡り　（秋）
6 重ね着してもとれぬ肌寒　（秋）
7ウ 連もなき貴船祭りの戻りかけ　（秋）
8 聲かけられて潜る暖簾
9 爪弾の音じみも粋な裏二階
10 すがる願でもまとまらぬおり
11 竹藪を吹きぬく風のさら〳〵と
12 青空高く影氷る月　（冬）
13 年仕舞大蝋燭を立つらね　（冬）
14 眼鏡の埃を幾度拭くやら
15 待得たる京の手紙の長々と
16 去来がおれば気遣はなし
17 ひとふしはへらすつもりの花の杖　（春）　菱
18 子寶だけに狭き雛棚　（春）　窓

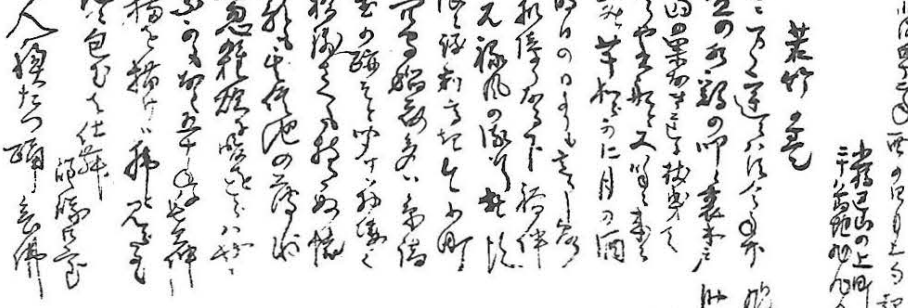
（注）
5尾の上　ヲノウへの約。峠や丘や山頂などなだらかな高地の上。
7貴船祭　貴船神社の祭礼。六月一日。（九月九日との説もある。）



19 北水の意図も妙なる金屏風　（冬）　仝
20 行かふ人の彳て居る　菱
21 入佛の式とて兒のねり出し
22 大八車沿寄せにけり
23 葉柳を夕風誘ふ川向ひ　（夏）
24 寛々椽にすゝる冷麥　（夏）
25 色白な一人娘を可愛がり
26 流行はかゝぬ金の指輪も
27 東台に江戸のけしきを見おろして
28 此頃稀な日本晴なり
29 住かへし庵に客する月の秋　（秋）
30 どちら明けても早稲の香のくる　（秋）
31 露霜に大山小山色しみて　（秋）
32 野に放ちある牛のほち〳〵
33 写真器も旅の好みに携へし
34 命なりけり腰の瓢箪
35 時や今上々吉の花ざかり　（春）
36 雲薄すりと長閑なる春　（春）

明治四十一年十月満尾

（注）
19金屏風　金屏風は冬の季語。ここは春の句にすべき所、冬にしたのは不審。27東台　関東の台嶺（延暦寺）、即ち東叡山寛永寺。
22大八車　近世、江戸で用えた大きな荷車。発明者の名前を取って名付けたという。



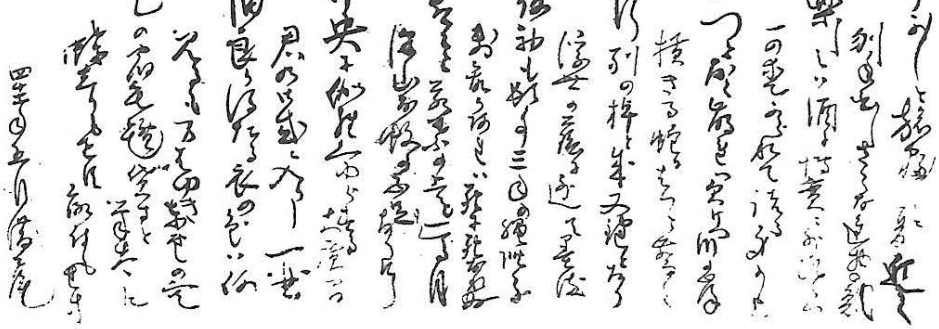
明治四十二年酉の四月上旬起

小樽区山の上町二十八番地旭旭風

㉓若竹の巻

1 雨音にまだ逆らわず今年竹　（夏）旭風
2 昼の水鶏の叩く裏木戸　（夏）池菱
3 敷島の果なき道に杖曳て　風
4 今や出船と又呼に来る　菱
5 ☾ 掘立の芋和らかに月の酒　（秋）風
6 明日の日よりも定まりし露　（秋）
7ウ 冷な肌障りなる下襦袢　（秋）
8 元禄風の流行る此頃
9 界隈に評判高き今小町
10 穴守稲荷多い京講
11 お仕置の跡ぞと聞けば物凄く
12 橋銭さへも持たぬ懐
13 ☾ 月影も其侭池の薄氷　（冬）
14 葱雑炊に暖をとらばや　（冬）
15 可も不可もなく五十年の長欠伸
16 猫を描けば虎と見らるる
17 ☽ 皆花に包むで仕舞嵯峨御室　（春）
18 人襖たつ踊念佛

（注）
3敷島　大和の国。さらに日本の別称、敷島の道とは歌道。
10穴守稲荷　東京羽田にある神社、祭神は豊受大神。開運招福の神。
嵯峨お室　嵯峨・御室ともに京の桜の名所。
17 18句目には、春の季語が必要であるがない。



19 うか〳〵と旅寝〳〵に夏近く　（春）　菱

20 刎ね出しそうな進物の鯛

21 楽しみは酒に博奕に外ひとつ

22 可愛がられて語る身の上

23 いつとなく崩れつ欠けつ川の岸

24 横ぎる蛇にはつと驚く　（夏）

25 行列の棹と成又鍵となり

26 浮世の陰に逃て墨流

27 仮初も頓に三年の縄階子

28 寿命があれば死に死なれぬ

29 青々と若葉の上を辷る月　（夏）

30 澤山な蚊の不足なりけり　（夏）

31 中央に伽羅くゆらする大廣間

32 君の御感に入りし酒

33 伯良が得たる衣の色は何

34 見るもまばゆき東雲の空

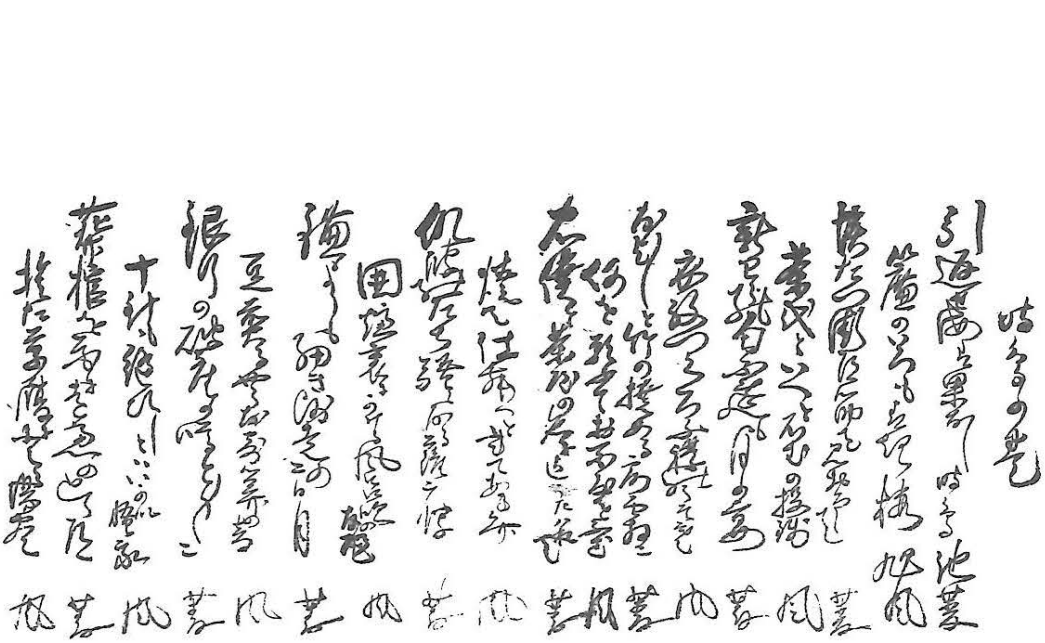
35 花の宿毛氈貸すと筆太に　（春）

36 蝶去りもせず落付もせず　（春）

明治四十二年五月満尾

（注）

26墨流　無差別・博愛・平和論を称えた戦国時代魯の思想家＝墨子の学派。33伯良　伯楽、馬喰、博労。



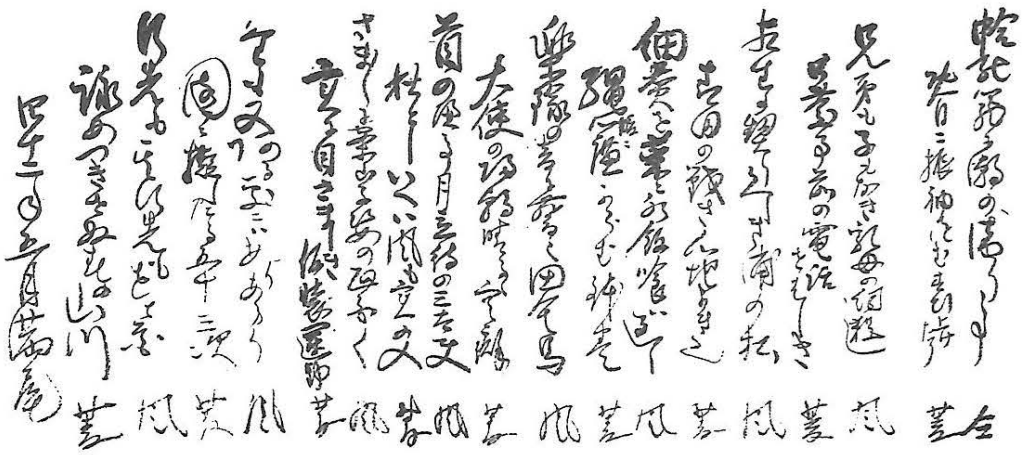
（略）明治四十二年西四月上旬文音張行

小樽旭旭風

㉔時鳥の巻

1 引返せ海は果なし時鳥（夏）池菱
2 簾のいろも青き樓（夏）旭風
3 埃たつ街道筋を見おろして　菱
4 茶代といへどほむの投銭　風
5 ☾新わらの匂ふ筵も月の宴（秋）菱
6 衣紋つくろふ襟のうそ寒（秋）風
7ウ なよ〳〵と竹の撓める露霜に（秋）菱
8 何を願ふてお百度をふむ　風
9 右僕と茶屋の名に迄うたはれて　菱
10 焼て仕舞へと書てある弁　風
11 仇波のたち騒ぐなる薩广潟　菱
12 囲爐裏にかける風呂吹のなべ（冬）風
13 ☾鎌よりも細き師走の二日月（冬）菱
14 豆煎るやうな寄算の音　風
15 銀行の破産の噂とり〳〵に　菱
16 十針も縫ひしとはいかい怪我　風
17 ☾葬棺を花に遠慮の廻り道（春）菱
18 捨た草履に登る陽炎（春）風

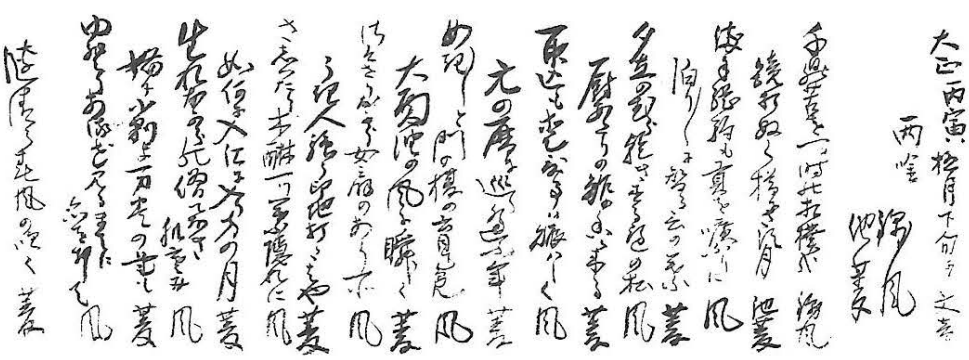
（注）
9 右僕　右僕射（うぼくや）は右大臣の唐名。



19 蛤の籠に潮の滴りし　（春）　仝
20 脊に振袖をむすび上げたり　菱
21 兄弟も子もなき乳母の飼殺し　風
22 御慶事前の電話せわしき　菱
23 相生の契り久しき浦の松　風
24 青田の戦ぎ心地よきなり　（夏）　菱
25 佃煮を菜に水飯喰い返し　（夏）　風
26 縄暖簾にからむ鉢巻　菱
27 楽隊の音に驚く田舎馬　風
28 大使の帰朝晴るゝ空癖　菱
29 首のべて月立待の三太夫　（秋）　風
30 秋としいへば風も実の入　（秋）　菱
31 さま〳〵に案山子姿の面白く　（秋）　風
32 実に目ざましき仮装運動　菱
33 金も又ある處にはありあまり　風
34 園に擬したる五十三次　菱
35 行先も其行先も花と花　（春）　風
36 詠めつきせぬ春の山川　（春）　菱

明治四十二年五月満尾

（注）
23相生　相生えの松。仲のよい夫婦に例える。25水飯　または乾飯を水に浸したもの。水漬け飯。29三太夫貴族　大名など富貴の家で家事・会計を預かる男の通称。家令。家秩。執事。



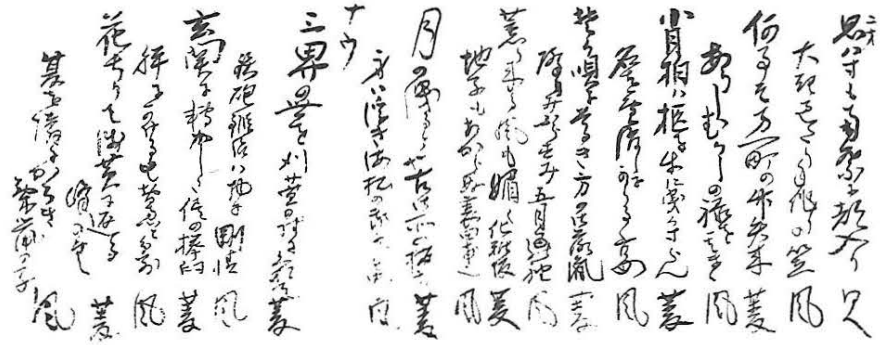
大正丙寅極月下旬より文音

㉕「千日の苦」の巻

両唫　錦風、池菱

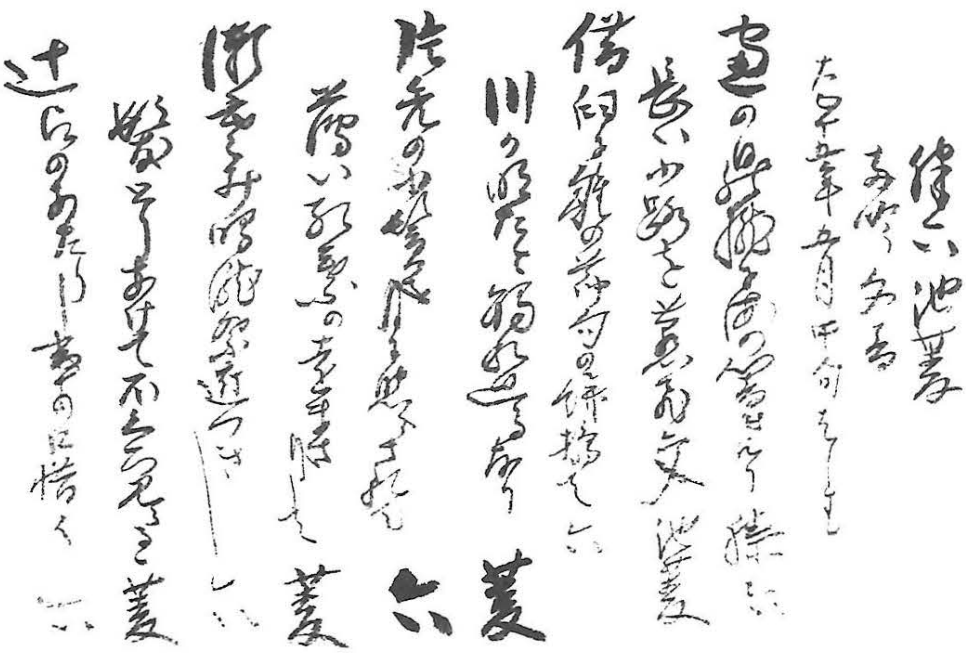
1 千日の苦を一ツ時の相撲哉　（秋）錦風
2 鏡打抜く樽にさす月　（秋）池菱
3 倆手綱駒も貢を曠ぶりに　風
4 泊り〳〵に替る言の葉　菱
5 夕立のむら乾きする庭の松　（夏）風
6 厨あたりの酢の香り来る　菱
7ウ 取込も愛度事は賑はしく　風
8 元の暦に巡り逢ふ年　菱
9 めき〳〵と門の榎の育けり　風
10 大酉池の風に瞬く　菱
11 さはさりながら女扇のあり所　（夏）風
12 うき人強う印地打たばや　（夏）菱
13 さしつたり木酣一ツ葉隠れに　（秋）風
14 如何に入江に入り方の月　（秋）菱
15 生れながらの僧でなき肌寒み　（秋）風
16 猫に小判よ万巻の書も　菱
17 ゆとりある花見るまでに名を押て　（春）風
18 漣清く春風の吹く　（春）菱

（注）
12印地打　五月五日大勢の子供が集まり、二手に分かれて石を投げあい合戦の真似をした遊び。13さしつたり　よしきた。心得た。13木酣　なったまま熟し切った果実。



19 思はずも南祭に都入り　（春）　仝
20 大死急たり手作りの笠　風
21 何事ぞ方一町の竹矢来　菱
22 ありしむかしの禄を其まゝ　風
23 肖柏は柩を牛に曳かすらん　菱
24 名を雪消しにかりる宴　風
25 その唄に尊き方の御落胤　菱
26 降るみふらずみ五月雨の袖　（夏）　風
27 薫り来る風も媚く化粧坂　（夏）　菱
28 地子もあがらぬ裏田甫なり　風
29 月の洩るとや古御所の板庇　（秋）　菱
30 身は浮き海松の家がらと虫　（秋）　風
31 三界の世を刈萱の野にくれて　（秋）　菱
32 鉄砲鍛冶は物に剛情　風
33 玄関に轉かした侭の欅臼　菱
34 秤にかける智恵と分別　風
35 花散りて浅黄に返る峰の雲　（春）　菱
36 夏を隣にかろき栗鼠の子　（春）　風

（注）
19南祭　京都石清水八幡宮の臨時祭。陰暦三月の午の日に行われた。21方一町の竹矢来　一町四方の竹矢来。竹矢来とは竹を縦横に粗く組合せて作った囲ひ。23肖柏　室町中期の連歌師牡丹花肖柏（一四四三～一五二七）。28地子　広く言ひば借地料や田租のこと。



滕六、池菱
両吟　文音

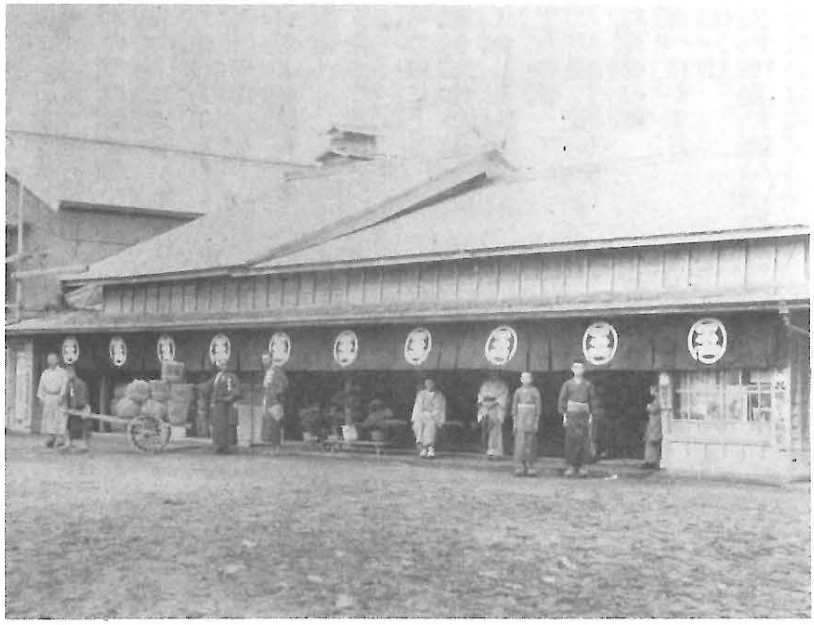
大正十五年五月中旬はじむ

㉖「窓の日」の巻

1 窓の日の朧に海の闇きけり　（春）　滕六
2 長い小路を燕飛交　（春）　池菱
3 借臼に雛の節句の餅搗て　（春）　六
4 川の明たと觸れ廻るなり　菱
5 片先の小鬢を月に照らされて　（秋）　六
6 薄い紅葉の遠まさりして　（秋）　菱
7 漸寒み鳴瀧祭近づきし　六
8 髪そりあげてほくろ見らる、　菱
9 辻占のあたりし事の口惜く　六

（注）
7 鳴瀧祭　九月二十八日京都西山鳴瀧の鎮守、福王子宮（宇多帝の母后を祀る）の祭礼。福王子祭。

△鎌田池菱



▷全盛期の㊤中島商店

昭和五年庚午年一月上旬

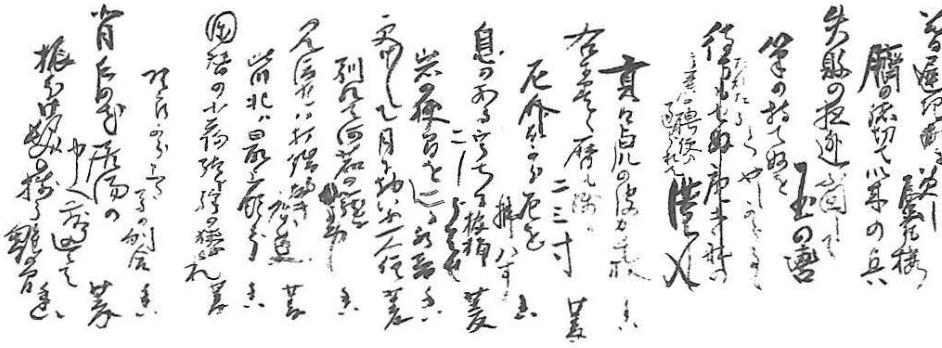
埼玉県大里郡大寄村　　文音両吟

茂木秋香
鎌田池菱

㉗雑煮の巻

1　箸あたりよき木の椀の雑煮哉　（春）　秋香
2　妻戸明ければ匂ふ梅が香　（春）　池菱
3　凧の尾の下に外山の並ぶらむ　（春）　香
4　出船を送る人のそはつく　菱
5　十六夜の月もいざよふ隙もなき　（秋）　香
6　去る燕に入替雁　（秋）　菱
7ウ　侮て飲んだ諸味の頭に上り　（秋）　香
8　布施も衣も置き忘れたり　菱
9　負た碁の腹いせかしら長尿　香
10　御奥廊下絹ずれの音　菱
11　逢ながらしみ〳〵話す折もなし　香
12　唸りも引かぬ短夜の鐘　（夏）　菱
13　蚤一ツ船から海へほかす月　（夏）　香
14　南無阿弥陀仏〳〵　菱
15　病む老の脊筋さすればすや〳〵と　香
16　どたりと壁の落る古家　菱
17　今日の花昨日の雨に色栄えて　（春）　香
18　どちら向ても酣の春　（春）　菱

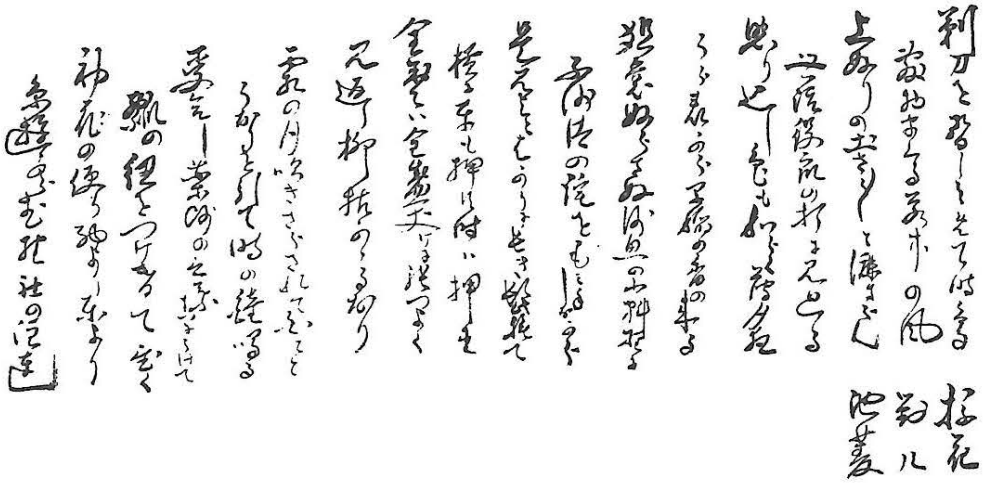
（注）
2妻戸　家の端に設けた両開きの戸。3外山　山の端を言う。
7諸味どぶろく。13ほかす　捨てる。　うつちやる。



19 暮遅き濱に美し蜃気楼　（春）
20 臍の緒切て以来の興
21 失敗の夜逃不図して玉の輿
22 筆の持てぬをくやしがらるゝ
23 待たれたる高麗の聘使の通られて
24 貢は虎の皮が千枚　香
25 右に巻く暦も残り二三寸　（冬）　菱
26 厄介ながら厄を拂はす　（冬）　香
27 息のあるうちに棺桶こしらはせ　菱
28 岩の狭間を辷る水音　香
29 更け〳〵て月に物いふ一人住　（夏）　菱
30 馴れて河鹿の籠にひょろ　（夏）　香
31 見渡せば打端もなき広筵　菱
32 此川北は最上領分　香
33 国替の小荷駄に駅の狭められ　菱
34 野良から上た馬の刎合　香
35 背戸の花居湯の中へ散り込みて　（春）　菱
36 振分け髪の揃う雛の間　（春）　香

（注）
29句目、夏の季語欲しい個所。例えば上五に「暑いなと」とか「涼しとか」を入れる。23小荷駄　馬に背負わせる雑多な荷物。34刎合　刎ほうり出す。はじきとばす。35背戸　家の裏口。「居湯」釜を取りつけずに、ほかで沸かした湯を湯船に移し入れる風呂。

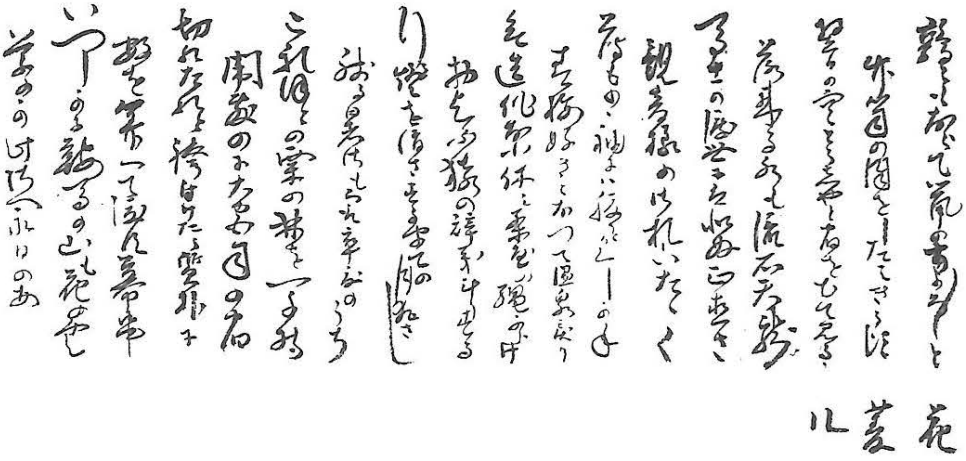
五清雅帖外解読



（略）明治三十二年夏於蜂庵興行
㉘歌仙「剃刀を」の巻

1 剃刀を暫しとゞめてほととぎす　（夏）　採花
2 敷もの捲る若竹の風　（夏）　對几
3 上塗の土さら〳〵と漉さすらむ　池菱
4 世話役衆の折に見まはる
5 ☾照込し色の和らぐ薄月夜　（秋）
6 うら表から早稲の香の来る　（秋）
7 ウラ 俎板もぬらさぬ沙魚の小料理に　（秋）
8 米かい沙汰を探ねしながら
9 是みよとばかりにアツき髭を撫で
10 横に車を押ときはおす
11 全盛は食盛だけに張つよく
12 見返り柳振りかゝるなり
13 ☾霜の月明さ連て白々と　（冬）
14 うなりを引て時の鐘なる
15 請合て医者の言葉を真に請て
16 瓢の紐を付かえておく
17 ☾初花の便り西より東より　（春）　几
18 糸遊からむ野宮の幣　（春）　菱

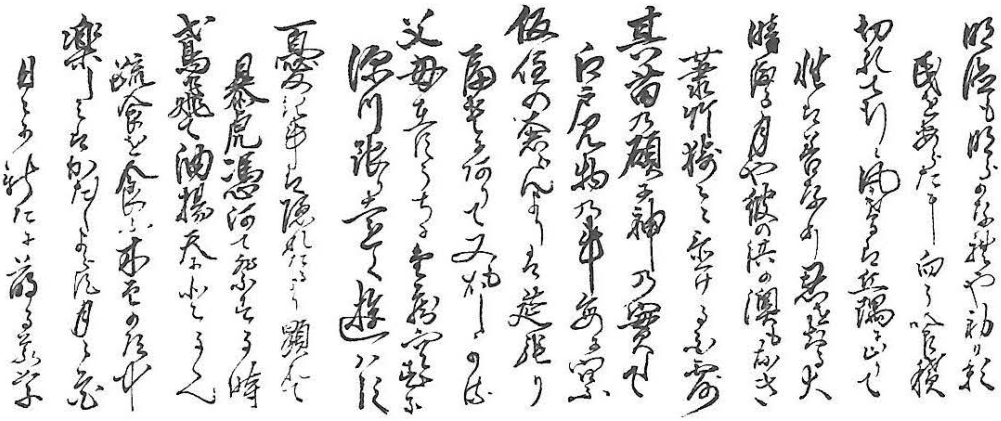
（注）
12見返り柳　日本堤から吉原遊廓の大門に下る衣紋坂にあった柳。朝帰りの遊客がここで名残り惜しげに振り返ったのでいう。



19 鶉とも化せで鼠のちょろ〳〵と
20 竹筒の酒をしこみ切る頃
21 翌日の空どうぢやと宿を出て見る
22 落来る水もさすが天竜
23 馬士の渡世には似ぬ正直さ
24 観音さまの御札いたゞく
25 薄ものの袖には腹をかくしかね　（夏）
26 青梅好となって温泉戻　（夏）
27 無造作な小休茶屋の縄がとけ
28 もの乞ふ猿の辞ぎばかりする
29 行燈を消さする迄の月夜さし　（秋）
30 残る暑さも最そっとの中　（秋）
31 是ほどの栗の林を一手持　（秋）
32 いそがしいのに大宮司の宿
33 切ぎれと袴付たる賃卦さ
34 数をかぞへてわたす幕串
35 いつしか鞍馬の山も花の雲　（春）
36 草のかげさへ永日のあし　（春）

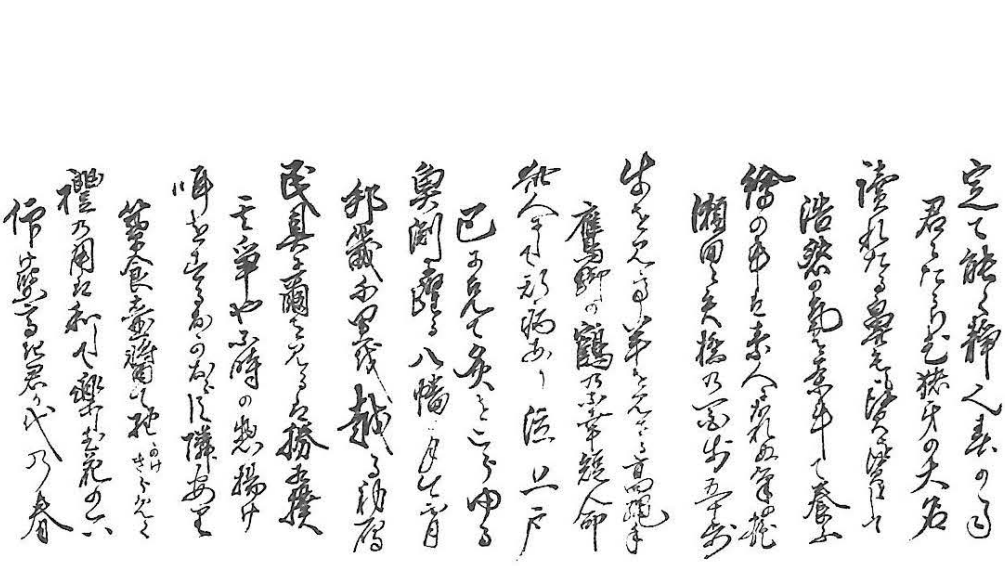
（注）
33賃卦　劣っているさま。35鞍馬の山　京都の鞍馬山。火祭りで知られる。

花菱　几



㉙大學之連歌

1 明徳も明らかなれや初日影　（春）
2 民をあらたに向う喰積　（春）
3 切れて行く風鳶は丘隅に止りて　（春）
4 性は善なり恩を知る犬
5 晴渡る月や彼の淇の澳もなき　（秋）
6 菉竹猗々と置ける白露　（秋）
7 其苗の碩に神の實して　（秋）
8 江戸見物の事毎に問ふ
9 仮住の奢らんよりは筵張り
10 富貴にありて又もほしがる
11 父母在すうちに金蔵空にすな
12 深川限り遠く遊ばず
13 憂き事は隠れたるより顕れて
14 暴虎憑河で祭する時　（夏）
15 鳶飛で油揚天に登るなり
16 疏食を食ふ木食の道中
17 楽しみはかた〳〵よらず月と花　（春）
18 日々に新たに萌る若草　（春）



19 定て能く静なり春の雨　（春）
20 君君たらむ猪牙の大名
21 讀れたる鼻毛も賢は賢として
22 浩然の氣を茶事で養ふ
23 繪の事は素人になれぬ筆の艶
24 瀬田と矢橋の百歩五十歩
25 牛を見て羊を見ざる高縄手
26 鷹野の鶴の不幸短命　（冬）
27 此人にして斯病あり泣上戸
28 己に克て灸をこらゆる
29 魚渕に躍る八幡の月今宵　（秋）
30 邦畿千里を越る初雁　（秋）
31 民具に爾を見るは勝相撲
32 其争や不時の惣揚げ　（秋）
33 呰をするなかならず隣あり
34 箪食壺醤で袖かけきらめく
35 禮の用は和して楽しむ花の下　（春）
36 仰げば高き君が代の春　（春）

（注）

2「喰積」正月の重詰料理。3「綿蛮たる黄鳥、丘隅に止まる」出典は詩経・小雅。5「彼の淇澳を瞻るに茶竹猗々たり」出典は大学。淇澳は河南省の淇という川の屈曲した所。茶竹はイネ科の多年草カリヤ　。猗猗は植物がなよなよ美しく靡くさま。7「其の苗の碩いなるをしること莫し」出典は伝八章。10「富貴天に在り」出典は論語・顔淵　11「父母在すときは、遠く遊ばず」出典は論語・里仁。

13「隠れたるより見はるるは莫し」出典は中庸。14「暴虎憑河」出典は論語・述而。15「鳶飛んで天に戻り、魚渕に躍る」出典は詩経・大雅。16「疏食を飯ひ…中略…楽しみは亦其の中に在り」出典は論語。述而。18「苟に日に新たに、日々に新たに又た日の新たなり」出典は伝二章。20「君君たり、臣臣たり」出典は論語・顔渕。22「浩然の気を養ふ」出典は孟子・公孫丑上。23「繪の事は素（しろ）きを後にす」出典は論語・八佾。24「五十歩百歩」出典は孟子・梁恵王上。25「羊を以て牛を易ふ」出典は孟子・梁恵王上。26「不幸短命にして死せり矣」出典は論語・雍也。27「斯の人にして斯の疾有り」出典は論語・雍也。

28「己れに克ちて礼に復る」出典は論語・顔渕。29「魚渕に躍る」出典は詩経・大雅。　30「邦幾千里、維れ民の止まる所」出典は詩経・商頌。30「民具に爾を瞻る」出典は詩経・小雅。32「其争也君子」出典は論語・八佾。33「徳は孤ならず、必ず隣あり」出典は論語・里仁。34「箪食壺漿」出典は孟子・梁恵王上、竹製の食器に盛った飯と壺に入れた飲物。35「礼之用和爲貴」出典は論語・学而。36「仰之彌々高」出典は論語・子空。

（特記）

「大學」は儒教の古典四書の一。此の巻では、發句から四句目迄に大學の三種類（明明徳・親民・止至善）を配し、五句目以降、儒教の古典名句を呼べば、應へる如く、才氣煥發打打發止と續けてゆくのはさすがである。（窪田薫）

㉚「扇」の巻

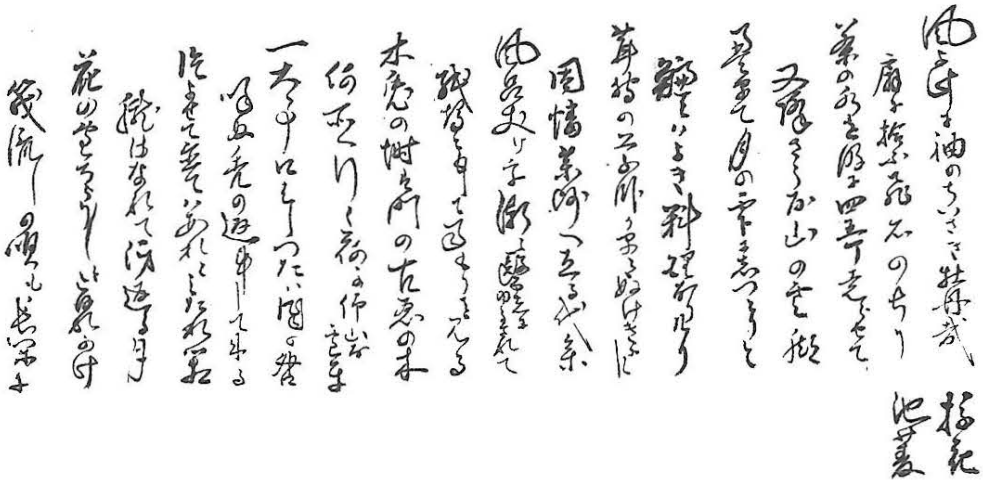
池菱
採花

1 目にたつや団扇の中の白扇
2 ふくさひらけば匂ふ青ざし
3 石積だやうに泥亀重りて
4 ここはむかしの城のあとなり
5 山の端に月の入るまでふら〳〵と
6 からねばならぬ粟の赤らみ
7 水いろも秋の流れとなりすまし
8 間の宿まて泊りこぼるる
9 身延へも廻る積りの夫婦つれ
10 灸の崩れわる痒きもの
11 板庇打ぬきさうな玉あられ
12 閻はあやなし凩の窓
13 憂き人に帋の礫を投付る
14 無事愛婚も姉は姉たけ
15 剃刀はかられていつも家になし
16 雫のたるる紐を干しけり
17 狭むしろの埃りを拂ふ花と月
18 寝迷ふ鳥も春の夕栄

(注)
2青さし　青差。茶の名。青麦のもやしを煎つて作る。10灸　《ヤキト(焼所)の音便形》。灸(きゅう)。やいとう。12　あやなし　文無し。模様がない。わけが分からない。

19 椀の蓋とれば蕨の香に立て
20 三百安の孫の我がま、
21 物好きにきれも古代の髭袋
22 鉢の魚にも養老の水
23 来合せて曼荼羅拝むむし干に
24 百日紅の咲き盛る寺
25 大釜を遣はねと折に磨かせて
26 年は寄ても物を忘れぬ
27 字典にはなひといはるる字の形
28 架かへたれど矢張反橋
29 突あげたやうにほっかり登る月
30 俄料理にほしき鱸の芽
31 新綿の手金渡らす折仕舞
32 縁はいなもの遠い處へ
33 娘とは云へども実は御主筋
34 保命酒とはきくも愛度
35 待くらす花の道順西ひがし
36 陽炎燃る三輪の馬場先

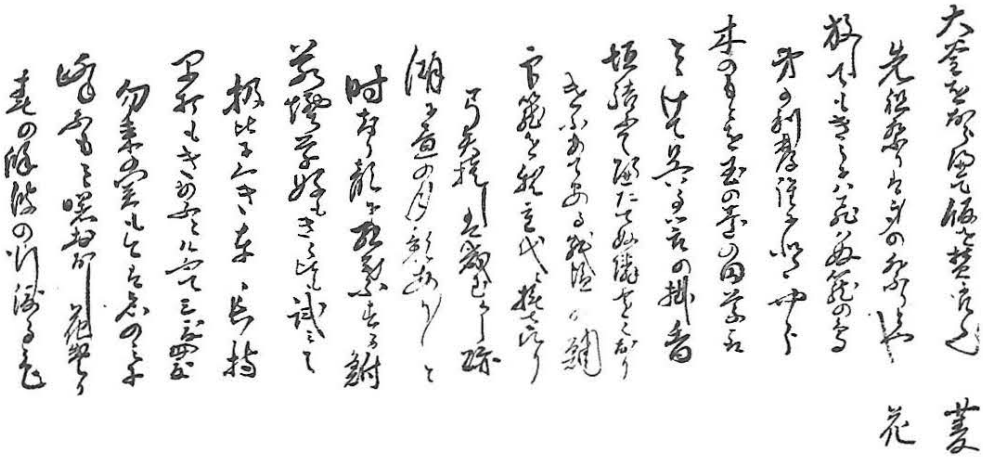
(注)
20三百安　「三百」は三百文、つまり価値が低い意。28反橋　中央の反り橋。36三輪　奈良県にある地名。三輪神社で有名。



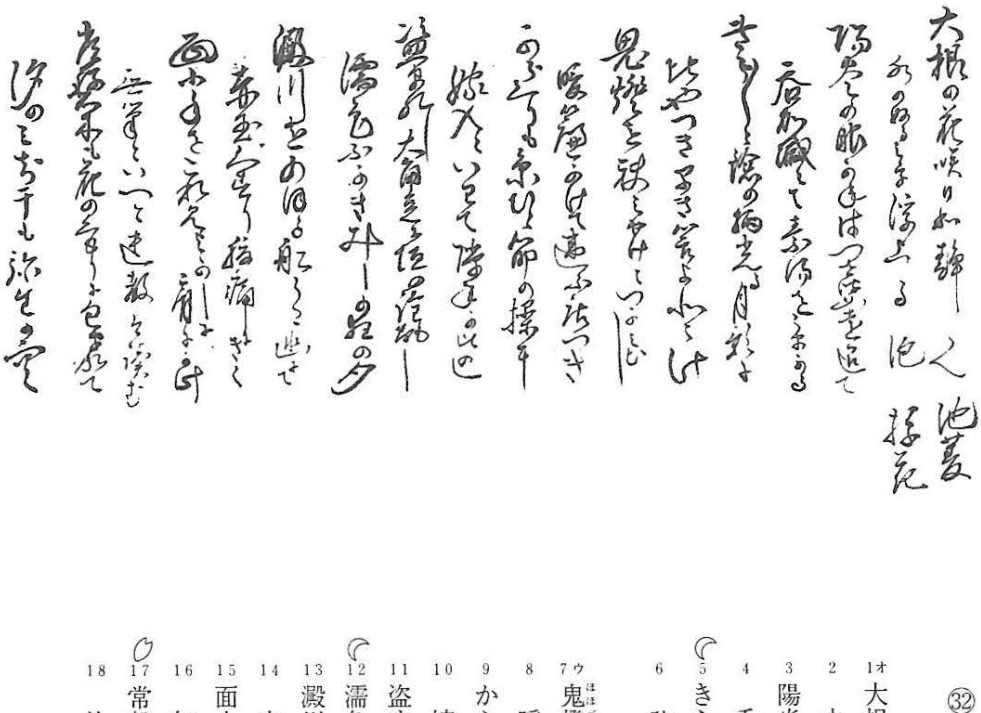
㉛牡丹の巻

對唫

1 風よけに袖のちいさき牡丹かな　採花
2 扇に拾ふ飛石の塵　池菱
3 茶の水を汲に四五丁はしらせて
4 又降さうな山の雲脚
5 畳まで月の雫にしっとりと
6 鮒とはよき料理なりけり
7ウ 茸狩の草臥がまだぬけきらず
8 いなば薬師へ立る代参
9 風呂おけを漸醫者にゆるされて
10 紙燭ともして雨もりを見る
11 木兎のねぐらは門の古指
12 どこへ行荷か仰山な雪車
13 一大事にはしったは酒のとが
14 呼ぬ禿のへんじして来る
15 片よせて置いてはあれどみだれ箱
16 おぼろはなて冴かへる月
17 花の雪ちらり〳〵とこぼれかけ
18 筏ながしの唄も長閑に



ニノオ
19 大釜を並べて飯を焚すぐし
20 先祖祭りは身のまつりとや
21 放してもきうには飛ぬ籠の鳥
22 弟の利發誰に似たやら
23 木のもとを玉のうてなの田草とり
24 とゞけて呉る筈の掛香
25 垣結ふてへだてぬ隣遠くなり
26 遣ふあてある紙鹽の鯛
27 印籠を親重代と撫でさすり
28 弓矢すてしは幾むかしあと
29 湖に昼の月影ありありと
30 時しり貌に紅葉する鮒
31ナ 若禮草好もきらいもこころにて
32 扱ひにくきくるま長持
33 早打もきのふとけふで三度四度
34 奈古會の關も今は名のみに
35 峰ふもと曙のおなじ花盛り
36 春の餘波の行渡る色

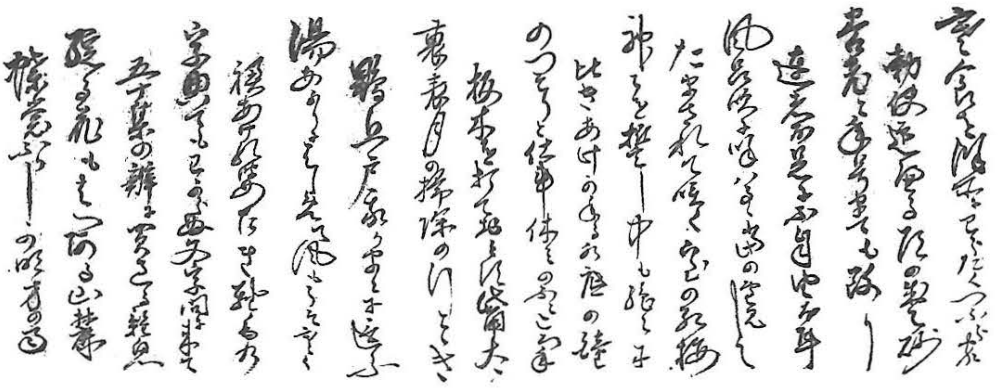


㉜鯉鱗行「大根之花」の巻

兩吟

池菱
採花

1オ 大根の花咲日和静也
2 水のぬるみて浮上る泡
3 陽炎の眼がねはづせば遠過て
4 呑加減にて素湯をうまがる
5 きら〳〵と鎌の柄光る月影に
6 ひやつき早き筈と北うけ
7ウ 鬼燈(ほほづき)を袂みやげにつかみひし
8 暖簾かけて運ぶ店つき
9 からくりも糸ひく筋の操に
10 嫁入といわで隙ねがひ込
11 盗まれし大角豆に垣の詮もなし
12 濡色ふかきみじか夜の月
13 澱川をのぼる船うた幽にて
14 赤玉くすり腹痛にきく
15 面小手をこれ見よがしに肩にかけ
16 無筆といへど遣教は讀む
17 常盤木も花のくもりに包まれて
18 汐のみち干も弥生の空



菱花

19 寒食を餘所にわたらくつぶら家
20 勅使迎へる道の盛砂
21 養老と年号までも改り
22 達者な足に不自由な耳
23 風呂吹に呼ばるる当の雪見して
24 だまされて咲く室の紅梅
25 神々を誓し中も絶々に
26 ひきあげかねる水底の鐘
27 のっそりと仕事休みのふところ手
28 坂木を打ておとす髯太
29 裏表月の掃除の行くとゞき
30 鵯上戸わがまゝに這ふ
31 湯あがりにはじめて風もうそ寒く
32 襖あければ太き軸もの
33 字典でもわからぬ文字問に来て
34 五十集の辨に買置る雑魚
35 綻る花もはつある山麓
36 蝶もふりしか明方の雨

(注)
「鯉鱗行」　歌仙の別名。鯉の鱗が頭から尾にかけて一条三十六枚あるということから。
池菱が上京した折りの両吟で、明治二十九年頃と思はれる。当時、採花女は女性では一流の俳人であった。
初出　俳諧集『平成元年のモザイク』窪田薫。平成二年。

㉝脇起鯉鱗行「梅が香に」の巻

1オ 梅が香にのっと旭の出る山路哉　祖翁
2 残る言葉のにほふ春風　以孝
3 髫髪ら(こども)が雲雀笛吹頃なれや　江雪
4 飲加減なる白湯をうまがる　石江
5 ☾きら〳〵とさゞ波光る月影に　若水
6 冷(ひや)えつきはやき里の北うけ　西史
7ウ 御所柿を袂みやげに用意して　静里
8 氣はたらきさへ違ふ世わたり　池菱
9 機たつる糸もすなほな丸額　戸方
10 嫁にゆくともいわで隙とる　松僊
11 盗まれし大角豆(きゝげ)に垣の詮もなし　柳蛙
12 ☾ぬれ色ふかきみじか夜の月　桂舟
13 澱川を登る船唄かすかにて　桃下
14 腹痛ならば赤玉がきく　蟻卵
15 面ン小手のふた、ひ時にあひぬらし　苔石
16 おぼつかなげに遺教は讀む　幾石
17 ☾常盤木ものんどりつ、む花曇　露光
18 潮の滿干も彌生なりけり　娥仙
19ナオ 寒食も他所に藁焚くつぶら家　與信
20 勅使迎へる道のつくひ　東洋
21 養老のめでたきためし語るらん　黄樹
22 眼と齒はよいが耳の不自由　拜山
23 風呂吹に呼ばるゝあての雪見にて　松山
24 晝(ひる)出た木兎(つく)のなぶられて居る　樂山
25 神かけて誓(かた)し中も絶々に　露蕉
26 ひきわづらへる思ひ幾筋　榮
27 往て戻る莫休に藥研堀　江雪
28 板木打(はんぎうつ)たら犬のおどろく　石江
29 ☾裏おもて月の掃除のよく届き　若水
30 鵯上戸(ひよどりじやうご)我がまゝに這ふ　桃下
31ナウ 湯あがりにふかめし秋をおぼえける　娥仙
32 襖あければ澤庵の筆　桂舟
33 蔵建て戊亥へ庭をとり廣げ　松僊
34 晴わたりたる雨のきれいさ　戸方
35 十ヲあまり二人居並ぶ花筵　以孝
36 ☾ほのなつかしき蝶鳥の夢　池菱

(注)
30鵯上戸　ナス科の蔓性多年草。液果は球形で赤く熟し、ヒヨドリが好むという。秋の季語。「赤い実がひよを上戸にしたりけり一茶」。
初出『石狩俳壇誌』前川道寛北海道教育社昭和六十年。明治三十五年発行『尚古集』から

あとがき

前川道寛

連句の解読がこれほど難しいものとは思いませんでした。しかしそれだけ難しい文字が解けたとき、内容がわかったとき、喜びも一入のものがありました。

先に『石狩俳壇誌』を書くおり、解読については高倉新一郎先生や谷沢尚一先生それに地元の先輩長谷川嗣氏に教えられて、今思えば大変幸運であったと思います。

この度はこうした方々は他界されたり、遠隔の地にあったり、その上連句には矢張り俳句とは違った難しさがあり辞典や参考書と首っ引き、それでも判らないものが多く年月ばかり経って行きました。そんな折り、札幌市在住の嘗てのノモンハンの戦友辻山三郎氏（元道新旭川販売部長、のち、札幌の教育新潮社編集責任者）が古文書に明るいことを知り大変助けられました。また、とくに難しい一字一句については道文書館の佐藤京子課長さんや札幌教育大学の君教授を訪ねて教えを受けたり、仙台市の谷沢尚一先生にお尋ねしました。お陰でこの池菱の「清雅帖」について一応の解読を行うことができました。

しかし、連句としての語調を整えることは素人の私にはできず、この面の振り仮名については元北海道東海大学教授窪田薫先生に全面的協力をして戴き大いに助かりました。

また、先生には単に振り仮名ばかりではなく、石狩に埋もれていた連句の貴重さも教えられました。この度の出版の原動力ともなった方と言えましょう。

さらに資料については、池菱の三代目中島勝人氏及び四代目勝久氏の御好意に預かるものです。また、最初に中島家の俳句資料を紹介して下さったのは畏友花川の了恵寺住職高木憲了師でした。

さて田中郷土研究会長さんをはじめて知ったのは、今から四十年程前のことでした。当時の田中さんは石狩町農業改良普及所長をしておられました。私は兼業農家をしていました。

ある農業講習会の時でした。私の質問に対して、その説明が的確で、親切で博学さを知り以来長い交流をさせて貰い公私の面で助言指導を受けるようになりました。その後役場に入られ企画課長時代、町史年表を発行されました。私が中島家の俳句資料を知ったのはこの時代です。

この時、田中さんは石狩に文学資料は無いと言われました。この言葉が私の俳句資料研究の魁となりました。そして俳句史を書く上で唯一の参考書がこの『石狩町史年表』でした。何回この年表史を読んだことか、今ボロボロになっている本、感慨深いものがあります。

今回の出版も私は高齢で専ら粗筋の解読のみにて、全般的気配りは田中会長さんの御世話になりました。

また、町教育委員会の石橋孝夫氏には日頃から何かと御指導を受けていますが、今回も会長さんを通して大変多くの御苦労を頂きました。

思えば長い年月にあって郷土研究会の皆様を始め随分と多くの方々に激励の御言葉や御助言、御指導を頂きました。

今改めて、これ等皆さまにお礼申します。

最後にこうした立派な文化遺産を残していかれた郷土先人達の偉大な功績を皆さまと共に誇りとも励みともしていきたいと思います。

平成八年二月吉日

前川道寛（まえかわみちひろ）

一九一三（大正二）年、石狩町大字生振村に生まれる。
臨済宗大学卒業。同村の妙法山春光寺住職。
石狩町社会教育委員、文化財保護委員など歴任。石狩町郷土研究会顧問。
受賞―石狩管内教育実践奨励賞、石狩町教育文化功労表彰。
著書―『石狩町俳句小史』『石狩俳壇誌』ほか研究発表多数。
住所―石狩町大字生振村三線北

窪田　薫（くぼた　かおる）

一九二四（大正十三）年、函館市に生まれる。
第二高等学校、京都帝国大学理学部、北海道大学文学部を各卒業。
東海大学教授を経て現在、連句協会理事、俳文学会々員、俳諧寺芭蕉舎主。連句同人誌れぎおん同人。
著者―句集、連句集、訳書等著編書多数。
住所―札幌市中央区北六条西二十三丁目

いしかり暦第十一号

―清雅帖　石狩尚古社連句集―

解読　前川道寛

校注　窪田　薫、田中　實

発行　石狩町郷土研究会

発行日　平成八年三月三十日

限定　三百部